

## これは岩瀬忠震の伝記ではない。<sup>1)</sup>

伝記あるいは評伝という歴史記述への問い

阿部 安成

### はじめに

横浜市神奈川区に本覚寺はある。この寺は幕末にはアメリカ領事館として使われたことがあり、山門の唐獅子にいくらか白い色が残っているのは、そのときに塗られた跡だという。いまも参道の石段を登るとその右手に、「史跡 アメリカ領事館跡」の標示が立っている。建立は、そこに刻まれた文字から、1954年4月のこととわかる。「開国百年」を記念して、この史跡標示が建てられたのだった。この年には開国百年を記念した碑が3つ、横浜市内に建てられた。1つが、旧イギリス領事館まえの「日米和親条約締結記念碑」、2つに野毛山公園の「横浜開港の先覚者佐久間象山の碑」、そして3つめが碑といっても肖像彫刻となる、井伊直弼の銅像である。二代めとなる直弼の銅像は、初代と同じく掃部山公園に建てられた。直弼の初代銅像は、1909年の竣工で、開港あるいは開



国にまつわる横浜の記念碑としてはもっとも古い<sup>2)</sup>。横浜開港五十年祭のときに、直弼初代銅像が立ち、開国百年を記念して、二代め直弼銅像と象山顕彰碑が建てられ、そして、1982年に本

<sup>1)</sup>本稿は、2007年度滋賀大学経済学部学術後援基金助成をうけた研究題目「表象としての井伊直弼」の研究成果の1つであり、阿部安成「直弼／象山／忠震」(1)(2)(3 未完) (『彦根論叢』第370号、2008年1月、同第373号、2008年7月刊行予定、掲載号、発行月未定)の補論となる。

<sup>2)</sup>ここで峻別が必要となる開港と開国についてはべつに議論する予定。直弼銅像については、阿部安成「二代めの肖像と履歴 - 1954年開国百年の横浜における井伊直弼の銅像」(『滋賀大学経済学部研究年報』第14巻、2007年11月)を参照。

覺寺山門わきに、岩瀬忠震の顕彰碑が建立された。「横浜開港之首唱者 / 岩瀬肥後守忠震 顕彰碑」と刻まれたこの碑の表面には、忠震の肖像がレリーフとなって浮かびあがっている。

岩瀬忠震とはだれか？ てごかな日本史の辞書を参照しよう。1 つは、『日本史広辞典』（山川出版社、1997 年）。そこでは、

幕末期の幕臣。父は設楽貞丈<sup>しだら さだとも</sup>。岩瀬家の養子。肥後守。老中阿部正弘に抜擢されて一八五四年(安政元)目付となる。海防掛などを兼務し、台場築造・大筒大船製造・軍制改正にあたる。五六年七月ハリスが来日すると、交渉全権となる。五八年老中堀田正睦<sup>まさよし</sup>と上京したが、条約勅許を得られないまま、日米修好通商条約に調印。新設の外国奉行となり、蘭・露・英・仏各国との通商条約調印の全権。一橋派だったため同年作事奉行に左遷され、翌五九年差控となる。

もう1 つは、『日本史辞典』（岩波書店、1999 年）。ここでは、

幕末の幕臣。通称修理。蟾洲<sup>せんしゅう</sup>・百里・鷗処と号す。伊賀守のち肥後守。旗本設楽貞丈<sup>しだら さだとも</sup>の 3 男で、旗本岩瀬忠正の養子。部屋住の身で要職に登用され、幕末外交を開国・通商へと推進した。1854(安政 1)目付に昇進し、海防掛等を兼ね、57 年、日蘭・日露追加条約を締結し、ハリスとの日米修好通商条約調印の交渉に尽力、翌年朝廷の勅許を得るために老中堀田正睦<sup>まさよし</sup>らと入京したが、承認を得られないまま全権として条約に調印。將軍継嗣問題では一橋派に属し、安政五か国条約調印後、井伊直弼により解職、差控の処分。水野忠徳、小栗忠順とともに幕末三俊とも称された。

と、それぞれに短く表現されている。忠震は、幕末に海防や外交を担った幕臣で、將軍継嗣問題にも関与、大老の井伊直弼による処分も指摘される人物である。

本稿は、この忠震が歴史として書かれるときのその手際を検証する作業であり、また、人物を歴史のなかに書くことや、人物をめぐるフィクションについて論点を示すことを課題としている。ここで、本稿がおもなテキストとする忠震の伝記や評伝などをあげておこう(筆者が使用した図書の所蔵元を末尾に記す)。

**text1** 愛知県小中学校長会編『新 郷土に輝く人々』下巻、愛知県教育振興会、名古屋、1961 年、所収、「開国のさきがけ…… < 岩瀬忠震 >」、愛知県図書館所蔵。

**text2** 愛知県小中学校長会編『開国の灯』郷土に輝く人々5、愛知県教育振興会、名古屋、

1970年、所収、「開国の灯…… <岩瀬忠震>」、豊田市図書館所蔵。

**text3** 石井孝『幕末悲運の人びと』有隣堂=有隣新書、横浜、1979年、所収、「挫折した開国政策の推進者 岩瀬忠震」、横浜市中央図書館所蔵。

**text4** 森篤男『横浜開港の恩人 岩瀬忠震』横歴双書第1巻、横浜歴史研究普及会、横浜、1980年、1982年再版、横浜市中央図書館所蔵、横浜市立大学図書館所蔵。

**text5** 松岡英夫『岩瀬忠震：日本を開国させた外交家』中央公論社=中公新書、東京、1981年、筆者所蔵。

**text6** 愛知県小中学校長会編『ひげのとのさま』愛知に輝く人々3、愛知県教育振興会、名古屋、1982年、所収、「開国のともしび 岩瀬忠震」、愛知県図書館所蔵。

**text7**『横浜開港之首唱者 岩瀬忠震』[横浜郷土研究会有志][横浜][1982年]横浜市立大学図書館所蔵。

**text8** 滝川一美ほか編『爽恢：岩瀬忠震顕彰碑建立記念誌』岩瀬肥後守忠震顕彰会、新城、1986年、国立国会図書館所蔵。

**text9** 岸上耿久『光芒遥かなり 小説 岩瀬忠震』忠震会、新城、1998年、横浜市中央図書館所蔵。

**text10** 設楽原歴史資料館資料研究委員会編『岩瀬忠震』設楽原歴史資料館資料集第2集、新城市教育委員会、新城[発行年不詳、1996年以降か]横浜市立大学図書館所蔵。

**text11** 森健次『暁星：開国の扉を開けた幕吏・岩瀬忠震』文芸社、東京、2001年、国立国会図書館所蔵。

**text12** 新城市設楽原歴史資料館編『設楽原ゆかりの外交官 開国の星 岩瀬忠震』新城市設楽原歴史資料館、新城、2004年、筆者所蔵。

別稿(脚注1)ですでに議論したtext4、7、8、10、12以外を、本稿ではおもにとりあげてゆく。岩瀬忠震はどのように書かれてきたか？が、本稿の問いとなる。

## 敗者という観点

**敗者のなかの忠震** まずは、石井孝の『幕末悲運の人びと』(1979年、text3)をみよう。石

井は、幕末維新史を専攻し、『横浜市史』の編纂にもかかわった研究者である。開国百年の1954年には、横浜で開かれた「開国百年歴史展」の展示目録に、「世界史的に見た日本の開国」という題の論稿を執筆したり、またtext4にあげた森の『開国の恩人 岩瀬忠震』の第9章「日本の開港の恩人は銅像が定めるものか」では、その著書である『港都横浜の誕生』（有隣堂、1976年）が直弼の評価をめぐる難詰されたりと（別稿参照）、横浜歴史の考察に石井はしばしば登場している。横浜で広く書店業を展開する有隣堂刊行の新書の1冊として、ふたたび石井の著作が上梓された、それが『幕末悲運の人びと』である。ここでは、忠震、孝明天皇、徳川慶喜、小栗忠順の4名が論じられている。いずれも、「苛烈な幕末の政争過程で敗北の憂目をみた悲運の人々」（「はしがき」）としてとりあげたという。本書をとおして、「敗者の維新史」ともいべき歴史像を形成することが著者の課題だった。この「敗者」の観点によって石井は、1つに「従来ややもすれば勝者にかたよった叙述をしている維新史」を、2つには「明治維新の源流を尊王思想に求める皇国史観」を批判の対象とした。ただし、こうした「敗者」の歴史を書くことは、石井が初めてではなかった<sup>3)</sup>。

石井は本書の「はしがき」で、忠震を軸として幕末史を描くことにより、幕府が「開国」をめぐる新しい情勢に対応しえたこと、しかしそれを妨げたのが直弼の政策だったこと、が明らかになるとあらかじめ示していた。直弼についても、「一編を用意しておいたが、ページ数の関係から割愛せざるをえなかった」と附言している。「挫折した開国政策の推進者 岩瀬忠震」と題された本論においても、「当時の幕府は、敏速に開国情勢に対応した（中略 引用者による。以下同）そのような対応の姿勢を推進したのは、海防掛に集まる一群の能吏であり、ここにあげた岩瀬忠震がその中心人物なのであった」、しかし「井伊大老の登場が、開国情勢に対応する内政の改革という、岩瀬の夢を一挙に打ち砕いてしまった」との書きようは、すでに「はしがき」で示されたとおりの内容だった。石井は、有能な幕吏と「保守」直弼との対抗で幕末史の一面を描いたのだった。直弼

<sup>3)</sup>たとえば、佐々木克『戊辰戦争：敗者の明治維新』（中央公論社＝中公新書、1977年）があり、石井の著作刊行後も、田中彰『明治維新の敗者と勝者』（日本放送出版協会＝NHKブックス、1980年）や早乙女貢『敗者から見た明治維新：松平保容と新選組』（日本放送出版協会、2003年）が刊行されている。また、敗者や征服を文化変容とのかかわりで論じるN.ワシユテル（小池佑二訳）『敗者の想像力：インディオのみた新世界征服』（岩波書店、1984年、原著1971年）もある。

と忠震を対照する記述はまた(1対1の組みあわせではなくとも)、石井が参考文献にあげた福地源一郎の『幕末政治家』(1896年～1900年)でもすでにおこなわれていた、「開国」をめぐる幕末史の書き方だった<sup>4)</sup>。

福地には『幕府衰亡論』(1891年～1892年)の著作がすでにあり<sup>5)</sup>、そこでは「明治維新の偉業を叙述」するのではなく、書名にもあるとおり、執筆の現時においてもはや衰え消えてしまった幕府が衰亡に到る歴史の探究がおこなわれたのだった。福地の論は、「幕府衰亡の因は淵源する所甚だ遠くして、啻に尊攘の近因のみに帰すべきに非ざる」、「徳川幕府二百八十年を保ちたるも封建と鎖国にして、その幕府を衰亡せしめたるもまた封建と鎖国なりき」がその要訣である。幕府はみずからの内部に、衰亡に到る要因を抱えていたというのだ。のちに『幕末政治家』で、徳川幕府の末路には傑と評価しうる人材がいたと論述することとなる(そのひとりが忠震)福地にとって、優秀な能力の人物を擁しながらも幕府衰亡は必然だったのだ。

『幕府衰亡論』における福地の直弼論を、ここでみておこう。

けだし井伊大老は徳川氏末路の豪傑にして、果敢敢為の氣象に富み、幕府の安危を以て己が一身に任じ、群議を排し、世論を顧みず、天下のためには、かくの如くならざれば不可なりと信ずれば生命を犠牲にするもこれを断行したること、実に一大政治家の大宰相たるに耻じざるの人なれば、余はこの人を推して幕府名相のその一に数うる事を躊躇せずと

と直弼を評価する一方で、將軍継嗣といわゆる安政の大獄をとりあげると、「その過もまた鮮なか

<sup>4)</sup>なお同書の校注者でもある佐々木潤之介の「解説」には、「歴史書」または「歴史学」と「史論」との違いが述べられている。前者は「関係する資料を博搜し、その検討を通じて事柄の客観的な姿を洗い出し、それらの史実の語るところによって歴史像を描こうとする」のに対して、後者は「語るべきことの必要から歴史的事実を照射し、読みとろうとする」と区別している。ただし「このような区分はそれほど自明のことではなく、また歴史学の発展のためには史論が必要であり、史論は歴史学研究なしにはありえないという関係にある」ともつけくわえている。そのうえで佐々木は『幕末政治家』などの福地の議論は史論だというのだ(『幕末政治家』佐々木潤之介校注、岩波書店=岩波文庫、2003年)。

<sup>5)</sup>引用は、1926年民友社版を定本とした『幕府衰亡論』(石塚裕道校注、平凡社=東洋文庫、1967年)からおこなった。校注者の石塚は『幕府衰亡論』が初版刊行後に第7版まで版を重ね、かつ改版、増刷となったことを、「政府と結合した維新史の編纂事業と、さらに、それに結びついてきた尊王史観・王政復古史観、さらにそうした立場をふまえての正統的な官学歴史学による明治維新のみかたに対して、つねに批判的姿勢をとり続けた読者層が存在したことを示している」と述べた(「解説」)。

らざりき」と批判することも忘れてはいない。そして、「世の井伊氏における、当時よりして今日に至るまで毀誉一定せず、これを憎めるものは国賊視し、これを賛するものは伊周氏視（賢臣の喩え）すといえども、余は両者共に、愛憎のために各々極端に走れるものと認むるなり」と、二分された、しかも定着してきたその直弼評を紹介しつつ、その双方に福地は疑義をつきつけている。修好通商条約調印をめぐるそれを「売国の罪科」にあげることも、また直弼を「開国の大本尊」と讃えることも、どちらも「實際を知らざるの評なり」と断じたのだったが、しかしここでは、福地が直弼をどのように歴史に位置づけるのかは、かならずしも明確に展開されることはなかった。

とはいえ、全 33 章の構成となった『幕府衰亡論』で、その章題にあげられた人名は、将軍の家茂と慶喜と、「御大老井伊掃部頭」だけとなる編成をみれば、福地にとって、幕府の大老職に就いた直弼抜きに幕末史（かつ幕府衰亡論）は論じられないこととなる。その直弼と条約調印をめぐる結びつく人物が忠震なのだ。直弼を論じるときに、だれをならべるのか、については、その相手が水戸の徳川斉昭や長州の吉田松陰となる記述もある<sup>6)</sup>。あるいは、それぞれの書き方に軽重や厚薄の違いがありながら、直弼と忠震との対照や対抗をとおして、幕末史や、開港もしくは開国の政治史が描かれることがある。石井も、また『幕末三傑』（春陽堂、1897 年）で忠震をとりあげた川崎紫山も、そして『幕末政治家』最終章の「幕末の有司」で「幕末の三傑」のひとりとして忠震を論じた福地も<sup>7)</sup>、忠震を軸とした幕末史記述のスタイルを示したのである。

**敗者としての忠震** だしいずれの論者も、忠震ひとりを幕末史のなかに書いたのではなかった。そうしたところで、松岡英夫の『岩瀬忠震』（1981 年、text5）は、忠震の伝記として、しかも忠震ひとりを幕末史の代表として歴史を描き、広範な流通販路にのった最初の書となった。松岡はどのように忠震を書いたのか。

これは、忠震誉めの書である。「偉大な外交家」であり、しかも「日本の外交をほとんど一身に担った」との功績が認められるべきでありながら、しかし「いまは忘れ去られている」ことが、松岡

<sup>6)</sup>たとえば、苫田悦雄『国史美談 水戸烈公と井伊直弼』英傑伝叢書 11（子供の日本社、1925 年）。直弼と斉昭を対照する議論は、いわゆる桜田門外の変の評価にもかかわることとなる。また安政の大獄にかかわっては、吉田松陰とならべられることがある（たとえば、永江新三『安政の大獄：井伊直弼と吉田松陰』日本人のための国史叢書 14、日本教文社、1966 年）。

<sup>7)</sup>川崎の『幕末三傑』と福地の『幕末政治家』については、前掲阿部「直弼／象山／忠震」(2)で論じた。

が忠震を書く1つの動機となっている。くわえて忠震は、研究や伝記が「まことに少ない」「敗北した側の幕府の政治家」である。このことも、松岡にとっての忠震伝執筆のもう1つの動機となっている。すでにみたとおり川崎や福地がそれぞれ三俊と三傑のひとりとして忠震を選良したことや、ほかにも幕臣や藩士による忠震評をふまえて、松岡は、「あの当時の幕府人でこれほどの賛辞を送られた者は岩瀬以外にいない」と判定し、そのうえで、安政4年3月に「積極的開国方針を基とした大小目付の上申書」の執筆者もしくはその執筆を主導したものを、「これは岩瀬忠震以外にありえない」と強く推断したり、彼が「断然、時流を抜く開国思想の持ち主であり、目付陣のリーダーとして以後の幕府の外交を推進したことは間違いない」と断言したりして<sup>8)</sup>、忠震を俊才のひとつとして書くのだった。

忠震について書くときにならずといつてよいほどとりあげられる、安政4年11月6日付老中宛上申書は<sup>9)</sup>、松岡の書でもその第5章「国家革新の大構想」のなかで「旅中で書く大献言文」としてその全文が引用され、「岩瀬上申書の眼目は、下田に代わる「横浜開港」にある」と指摘されている。ただし、松岡は、この11月の上申書にさきだつ6月の大小目付の上申書のなかにも<sup>10)</sup>、「大坂開港反対を述べたあとに、「御膝元近くの御場所にて御開きの方、御為然るべくにつき、初発応接これ有る神奈川横浜港の辺、然るべしや」とあって、このころは岩瀬が長崎出張で留守であったのだが、そのまえから目付陣のあいだで、下田閉鎖・横浜開港の意思統一ができていた」と紹介している。これからすると横浜開港を最初に唱えた幕吏は忠震ではなくなってしまうのだが、松岡の関心は、だれが「横浜開港の首唱者」か、「横浜開港の恩人」であるのかを論じるところにないので、この6月の大小目付上申書はそう重要視されてはいない。もっともここでは、6月の上申書と比較して忠震のそれでは、横浜開港が必要であることについて、その理由を「明確に、そして言葉を尽くして説いている」とその特徴があげられている。したがって、最初や唯一であるかはべつにしても、ここにも忠震の優秀さがあらわれているといたいのだろう。

<sup>8)</sup>松岡はここで「一つの疑問」として岩瀬も「幕府即日本という形で漠然としていた」のかと尋ねている。幕府とは異なる日本国家の構想を思想成長の指標とするというのだろう。

<sup>9)</sup>これは、東京帝国大学編『大日本古文書 幕末外国関係文書之十八』(東京帝国大学文学部史料編纂掛、1925年)の史料番号89にある。

<sup>10)</sup>これは、東京帝国大学編『大日本古文書 幕末外国関係文書之十六』(東京帝国大学文学部史料編纂掛、1923年)の史料番号173にある。

しかし修好通商条約の調印は、ハリスとの交渉においても、勅許をめぐっても、難航する。「条約勅許の失敗」と題された第 6 章の末尾で、「堀田使節団の滞京中は、権威と陰謀と、無知と利害の入りまじった奇怪な舞台の出現であった。それはもう岩瀬忠震の舞台ではない」と書かれてしまえば、執筆者が舞台監督よろしく歴史のなかの登場人物に、その時代が彼の舞台としてふさわしいかどうかを判断してしまうのである(第 6 章最後の見出しは「岩瀬の出る幕なし」となっている)。岩瀬を高く評価するがゆえの所作である。そして、ここでの「失敗」が、「時代の最先端を行く岩瀬の構想が、「固陋蒙昧」の京都側にぶつかって、挫折感はひとしお強かったであろう」と忠震を萎えさせる出来事となった、と著者によって看取され、忠震を倒されたもの、敗れたものと評する始まりとなったのである。そのきっかけは、京都にあったというのだ。

第 7 章「ついに日米条約調印」では、最初の見出し「井伊大老の出現」のもと、それが「大事件が勃発」したことと著者によって示され、忠震にとっても「まったく予想しなかった井伊大老の出現によって、(将軍継嗣の構想も)もろくも崩れ去る」、また、「井伊大老は幕閣の実権をにぎり、政治・人事に独裁的権力をふるってくる。岩瀬も単なる幕府官僚として、その権力にはね飛ばされることになる」と、倒され敗れる忠震の悲運第 2 幕となる。この舞台回しにおいては、直弼の登場を松岡は低く、もしくは負としか評価しない<sup>11)</sup>。それは、彼が賛美する忠震が当時において直弼を評価していなかったこと、大老発令当日に忠震たちがその任命に抗議したことによって明らかとなるのだ。

忠震からすると、直弼は「外交面ではまったく無策の人」とみえ、他方で、直弼からみれば、「調印と勅許不成功という現実の板ばさみとなって、一日延ばしという手しかとりようがなかった」、との解説が著者松岡によって挟みこまれる。そしてこれもまたよく知られている場面である、直弼と、全権となってハリスとの交渉にあたる井上清直と忠震とが対峙する場で、調印延引を主張する直弼に清直が詰め寄って、どうにもやむをえないときには調印も可という言葉を引き出したその清直の所為を、松岡は「岩瀬の指示を受けてのことだろう」と、本文に( )をつけて記したのだった。史料にもとづかない考えであっても、それが明確にわかる推論としてあえて記すこ

<sup>11)</sup>直弼だけでなく彼の「謀臣」長野義言も同様で、「稀代の煽動家」とくりかえし書かれてしまう。



とで松岡は、ことさらに忠震を傑材として記録したのだ<sup>12)</sup>。

忠震は、米、蘭、露、英、仏との修好通商条約(いわゆる安政の5か国条約)のすべての交渉と調印をおこない、また和親条約についても蘭と露との追加条約の交渉と調印を担った。この業績をもとに、「岩瀬がつねに幕府全権団をリードしたことは疑いを容れない」ので、「まさに幕末の幕府における大外交家といわねばならないし、日本の外交史においてその功績は評価されねばならない」と最大級の賛辞を松岡は忠震に呈している。新城市の歴史資料館が発行した図録(text12)の表紙に、「設楽原ゆかりの外交官 / 安政の五ヶ国条約全ての調印者」とあるとおり、後段のこの標語が忠震を賞讃するときの1つの型といまもなっている。条約調印の栄誉をもって、忠震を成功した外交官として描くことも可能だろう。

だが、その後の現実の展開も、忠震伝執筆者の企図もそうはさせない。忠震の(同時にそれは幕府の)「悲劇」や「運命」が、松岡によって書きあらわされてゆく。それは直弼による忠震の処断だ(第8章「将軍継嗣問題の紛糾」、第9章「左遷から処罰へ」)。それゆえに、松岡の直弼評は厳しく、その「酷薄さと、権力行使の露骨さ」が指摘される。安政の大獄も、「その常軌を逸した苛酷な処罰」と口を(筆を)極めて裁断される。「井伊大老を支配したのは憎悪感であって、排除の思想だけである」と、直弼が抱いていたとする感情にも観察者の非難がおよぶ。その直弼は、「一橋派有司中でも岩瀬を最も嫌っていた」し、外交をめぐる「専門職に誇って傲慢不遜の態度に出ているとして怒っているが、その点では岩瀬が代表である。だから、岩瀬こそは排除すべき人物の第一号と考え」ていた。本書における、忠震と直弼とのあいだに生じた、もっとも強い緊張の高まりを示す記述である。忠震と直弼との対立は、本稿でこれまでみてきたテキストのなかでは、この松岡の著作のなかでもっとも高まったのだった。

直弼と忠震のあいだにあった事案は、将軍継嗣と条約調印である。この2つについての松岡

<sup>12)</sup>条約調印をめぐる幕府専断調印への批判に対する忠震の意見として松岡は、福地の『幕末政治家』から清直の「直話」を重引している。そこにみえる「国家の大政に預る重職は、この場合に臨みては、社稷を重しとするの決心あらざるべからず」をふまえて忠震の「思想は、すでに幕府を超越している(中略)はっきりいえば、幕府はつぶれてもいいんだと岩瀬はいいたかっただろう」と松岡は述べ、さき(脚注8)にみた思想からの成長を指摘したということなのだろう(福地はこの「社稷」をふくむ直話になにも論及してはいない)。つづく「条約板行の提案」についても「安政五年という時代において、このような頭脳の働きを示した岩瀬は、やはりただ者ではない」と松岡は忠震を誉めている。

の記述は、前者は「勝者が敗者を処分するという経緯」となったとそれがたどられ、「幕府有司中で最も憎悪され、最も重い処罰を受けた」人物が忠震となり、後者をめぐっては「井伊大老から見れば、外交テクノクラートという特権を誇り、大老・老中の権威を軽視するやつという憎しみがあつたことは事実」で、このことと將軍継嗣が相乗して、さきの「有司処分中の最重罰」、つまり永蟄居となったのだと、展開している。忠震は、左遷、処分、罹病、そして「急死」といったその処遇と死が、伝記作者によって「悲劇」や「運命」と解釈されたのだった。これが松岡による、忠震伝である。

松岡は、忠震の諡となった「爽恢」をとりあげて、「接する人びとを、五月の風が吹きぬけるように明るい気分にさせる爽快な人物、それが岩瀬忠震であった」と、その二文字をみずからの忠震評の根拠とも、また忠震のひととなりのあらわれともとらえてみせた(諡を忠震のひととなりをあらわす代表とするこうした表現は、text8 にあるとおり、忠震顕彰誌の書名にももちいられる)。一方の直弼は、「ちょっとでも気に入らぬ者は排除するという」その「人間的酷薄さ」が暴露され、くりかえしそれが彼の劣性として指摘されてしまう。松岡の著書では、この「爽快と陰湿」という対比で、忠震と直弼の対照があらわされ、陰湿な後者が「大老という最高の権力者であったところに、時代の悲劇があつた」と歴史が総括されたのである。忠震が傑物である分、直弼は劣位におかれてしまう。

「倒された側」「敗北した側」の政治家のひとりとして忠震をとりあげ<sup>13)</sup>、「大きな変動期」とみなされた幕末において、忠震と直弼の対照を描く松岡のスタイルは、石井や福地の記述とそう大きなかわりはない。忠震は、幕末史を論じるときに欠かせない俊あるいは傑として、しかもそれにもかかわらず敗れてしまったがゆえに、いわば歴史を牽引し、かつ時代に動かされてしまっためぐりあわせの悪い人物だと、幕末史のなかにおかれたのだった。これが、忠震と幕末を描くときの1つの型となった。ここでは、幕末史に敗者として描かれたものが、どこの出身であるかはほとんど重視されはしない(將軍や天皇はともかく、幕臣と知らされればよいのだろう)。

こうした忠震記述の型では、対照される直弼の書き方はまちまちである。古くは福地が示したと

---

<sup>13)</sup>松岡はすでに「敗北した側の政治家」として同じ中公新書で大久保一翁を書いていた(『大久保一翁:最後の幕臣』中央公論社、1979年)。

おり、直弼をめぐる二分された毀誉のいずれもが「極端」にすぎ、またどちらもきちんと「実際」をふまえていない、と思惟するものから、松岡のように激しく直弼を誹る記述もあった。ところで、こうした忠震と直弼の対照や、直弼をめぐる二分された人物評のなかでは、直弼は勝者と敗者のいずれになるのだろうか。石井は、その著作の『幕末悲運の人びと』に直弼をふくめる構想もあったと明かしていた。幕府の側ということであれば、忠震も直弼も同じ位置にある。暗殺された直弼の死は、非業や不慮と形容できるのだろうか。「敗者の維新史」を書くという石井の構想では選ばれながら、しかし実際にはその歴史にとりあげられなかった直弼は、忠震に照らしたときどのような歴史となるのだろうか。

## 郷土の偉人伝

**図書刊行** 不遇をかこつ、といってよい人物であるからこそ、なおのことその有才を顕彰し賞讃する努めが、そのひとのゆかりの地においておこなわれるときがある。

愛知県小中学校長会が編集し、愛知県教育振興会が発行した『郷土にかがやく人々』(上巻、1957年)はその書名と構成と内容をかえながら、30年もの長期にわたって刊行されつづけてきた郷土の偉人伝である。子どもたちが将来なろうとしているひと、理想とする人物はどのようになっているだろうか、という問いに教師みずからがだした答えは、「たいそう悲観的なもので、多くの子どもたちには「かおり高い理想も、尊い仕事にあこがれるゆめも、偉大な業績を残した先人を慕う気持ちも、うかがえ」なかったという危機感が表明されたのだった(愛知県小中学校長会文教科委員一同による同書の「父母と教師のかたがたへ」)。そこで、「わが郷土につながる偉大な人物の業績をえがき出して、これを子どもの読み物としよう」との目的で本書がつけられた。ここで教師から子どもにむけられた46話の物語は、名古屋、尾張、三河からほぼ均等に選出された、輝く郷土の偉人伝となった。

この第2シリーズとなる『新 郷土に輝く人々』(下巻、1961年、text1)に、岩瀬忠震が「開国のさきがけ」として登場する。忠震がその担当者のひとりとなって「骨身をけずる思い」をしてなし遂げた日米修好通商条約の調印は、「歴史的な開国への第一歩」となった、そこに到る偉業が記されたのである。国家をおもう俊才の忠震、彼をとりたてた老中阿部正弘、両者の協議により、戦

争を避けるためにも、「開港は国家の大事」となった。日米交渉では、ハリスやヒュースケンを驚かせる能力と真摯さをあらわし、全権の任をうけて「時の大老、井伊直弼の黙許を得て、米艦ポーハタン号上で、日米修好通商条約の調印を果たした」人物が、「三河国設楽郡(今の新城市)の領主、設楽九十郎<sup>(マ マ)</sup>貞文の第三子として出生」した忠震そのひとだった。忠震の偉人伝は、「実にりっぱで、かれ(忠震)こそ真の外交官と言えよう」というハリスの日記の引用で閉じられている。

海外にもその英才が知られたわが郷土の偉人にとりあげられた忠震だったが、彼はじつは、江戸生まれだったのだ。だが、それは愛知県で上梓されたこの偉人伝のどこにも記されていない。郷土につながる、あるいは「わが愛知県に深いゆかりをもった人で、しかも、偉大な業績を残した人」(前掲愛知県小中学校校長会編『郷土にかがやく人々』上巻「あとがき」)であれば、生誕地がどこかは厳密には問わないということなのか。

また、本文とはべつの囲み記事となる「岩瀬忠震・略歴」では、条約調印の翌 1859 年には、「將軍の世嗣ぎ問題で、大老、井伊直弼に直言し、ちっ居を命ぜられる。江戸の岐雲園で詩歌に親しむ」の項がみえる。蟄居とあるだけでその説明がなければ、小中学生にはそれがなんのことだかわからないだろう(てぢかな国語辞典では蟄居とは「家の中にとじこもって外出しないこと」と、まるで引き籠りのようにも書かれている)。家のなかで詩歌に親しんでいた、というのであれば、これを処罰とは読まないものもいるだろう。『新 郷土に輝く人々』のなかでの忠震は、かならずしも「敗者」ではなかった。輝くひとは、その荣誉が讃えられるべきであって、ことさらに敗者とみせることもないのだ。

第3シリーズはそれまでの全3巻から2冊増えた全5巻となり、「野に咲く梅」(服部担風)や「尾張名所図会」(野口道直)などがとりあげられながらも、「開国の灯」と題された第5巻(1970年、text2)は、忠震の章の表題と書名が同じなので、この1冊のなかでは彼が主役であるかのような構成となっている(表紙もアメリカ合衆国国旗を掲げた黒船の絵)。物語の筋はさきの一編とそうかわりないが、家康以来の譜代の家でありながら鎖国ではなく「国交を開く」との意見をもつ忠震の決意、条約勅許を得られなかったこと、大名のなかには条約に反対するものが多かったこと、將軍継嗣のことで直弼によって解職となったこと、が記され、忠震の事績をあらわすために旧友が建てた碑(東京の白鬚神社境内)にみえるという、「幕末の国防や外交の仕事で、忠震の関係

しなかったことはない」との彼の功績が示され、忠震の章は終る。

「開国の灯」という忠震伝では、第 2 シリーズが記述を終えた条約調印以後のことが記され、「正しいと信じることを、どこまでも押し通した忠震」は、「むずかしい外交の仕事を受け持ち、阿部・堀田両老中、井伊大老の力になった忠震であったが、将軍の世継ぎを決めるとき、井伊大老と異った意見を主張したため、役をやめさせられてしまった」と、その解任という処遇が教えられている。ただし、ここでの「岩瀬忠震略歴」ではそのことが、「将軍の世継ぎ問題で大老井伊直弼と対立。職をしりぞき、詩や歌に親しむ」となっている。略歴では、まるで隠居後に趣味のひととなったかのように描かれた忠震である（他方で、「対立」という緊張をあらわす表現もある）。それはともかく、ここでは、「友情の石碑」の見出しのもと、「同郷の学友永井主水正尚志」が「開国の灯を掲げた、忠震の功績を、忘れてはならない」との思念によって、東京向島の白鬚神社境内に建てた碑のことが掉尾の記述となっている。建碑という没後の顕彰のされ方もまた、忠震を輝く郷土の偉人たらしめているというのだ。ただし、この碑文に「開国」の文字はない<sup>14)</sup>。他方で、この第 3 シリーズには、他のシリーズの忠震の章にはない写真が挿絵にもちいられている。「岩瀬肥後守忠震の署名がある日米修好通商条約」とキャプションがついたそれは、条約原本の写真である。開国を主張したり条約を締結したとことばで知らされるより、この署名の写真は条約調印と忠震とのつながりを知らしめている。

第 4 シリーズは全 10 巻に増大し、刊行も 10 年の歳月をかけた大事業となった。「ひげのとのさま」と題された第 3 巻(1982 年、text6、ここでの殿様とは加藤清正のこと)に、「開国のともしび」として忠震の物語が載っている。忠震の、「開国こそ、日本の進むべき道だ」との信念、勅許を得ずとも条約調印を断行するとの決意が記され、「まだ決心がつかなかった」直弼が、全権となった清直と忠震から方針の確認をもとめられる 条約調印直前の幕府内での協議という 1 つのクライマックスとなる場面では、条約を調印するよう「しぶしぶ答えた」直弼と、「迷うことなく条約に調印した」忠震たちとの対照として最高潮の場がみせられている。このシリーズでは、条約調印を

<sup>14)</sup>1883 年に建立されたこの碑には「米国軍艦浦賀に來り幕廷漸く事多し。旧慣を革め新令を布き、砲墩を築き巨礮を鑄し、大艦を製り海軍を創め、衝禦の業盛んに興る。而して君其の事に関はらざる無く、拮据して暇あらず。又外国使船の來りて交通を求むる者には、港口の遐邇を論ずる無く、君をして之が迎接を為さしむ」と刻まれている（『爽恢』text8）。

もって、この忠震伝が閉じられる 「この日は、日本が世界に向かって新しい第一歩をふみ出した記念すべき年となった」と、忠震はこの一步をすすめた偉人となったのだ。ここでの「岩瀬忠震・略歴」の安政大獄にかかわる記述は、「閉門を命ぜられる」と短かった(辞書では、「閉門」は処罰の1つとも記されているので、辞書を引けばこの意味はわかるかもしれない)。

この第4シリーズの「岩瀬忠震・略歴」にはまた、「大老井伊直弼が殺される」の項がある。第3シリーズにはなかった情報で、第2シリーズでは「桜田門外の変」とだけ記されていた項である。第2シリーズと第3シリーズでは直弼の「黙許」とだけ記されていた条約調印をめぐる交渉が、第4シリーズでは直弼と忠震たちとの方針と意欲の違いが明確に描かれた変化とあわせて考えると、この愛知の偉人伝ではシリーズがあらたまるにつれて、直弼が条約調印にむけて尽力したり貢献したりしたその度合いがいくらか弱まっていったとみえる。その分、「日本が世界に向かって新しい第一歩をふみ出した記念すべき日」と評価される日米修好通商条約調印日に到る偉業の功績が、忠震に帰せられるのだった。

この郷土に輝く人びとというシリーズは、第1シリーズ上巻に記されたとおり、子どもたちの多くが、「なんら深い思慮もなく、映画や雑誌などの商業主義、営利主義に幻惑されて、ただいたずらに、職業野球の選手やレスラーや流行歌手などの表面的なはなやかさにあこがれを持っている」ことへの危機感から刊行された経緯があった。このシリーズではどれにも、巻頭言が挿入されている。それによると、「多くの人の 胸の奥深く」に「いつまでも消えないで / 生きている人」、「びっくりするほど でっかい / 仕事を残した人」、あるいは、「人の心の清らかさで / さわやかな歴史がつくられ」たり「人の力のたくましさで、 / 新しい歴史を切り開いた」たりした業績、こうした人物や仕事が「わが郷土の生んだ、 / そういふ偉大な人々の物語」として、子どもたちに贈られたのである。しかし、偉大ではあっても忘れられた物語もある。わが郷土で埋もれようとする逸話を、「なんら深い思慮もない」子どもたちに伝えてゆくことも、教師の役割ということなのだろう。

くりかえせば、新城(愛知)生まれではなかった忠震が、郷里の偉人として、没後百年かつ日米修好通商条約締結百年をかぞえる1960年代初頭に、新城でもあらためて発見されたのだった。その始まりには、新城の東郷中学校校長小野田孝による『東郷ゆかりの岩瀬忠震公』(1960

年)が刊行されたものの(この校長が前出第2シリーズの忠震の章を執筆)<sup>15)</sup>、そうした史書や伝記を刊行したり碑を建立したりして忠震の顕彰をおこなうよりも、小中学生にむけた郷土の偉人伝に忠震を組み入れてそれを普及させることに熱意が注がれたように見える。第3シリーズの第5巻(開国の灯)は、初版の刊行から2年で三版となっていた(横浜中央図書館所蔵)。他県の図書館にも寄贈するほどに、あるいは購入されるほどに大量に発行され、同書は版を重ねたのだった。

シリーズ郷土に輝く人びとには、それが最初に刊行されたときにはその現時を嘆き、過去の人びとの偉業をみつけだし、その輝きによって子どもたちの頽廃を改善する意図が籠められていた。こうした教育における忠震は、倒されたものや敗北したものとして教材になったのではない。輝く偉業をみつけだす企図のなかで忠震は、日本を開国に導いた、郷土の(あるいは、郷土にゆかりのある)偉人として教えられたのだった。忠震を歴史のなかを書くときに、それを偉人伝とする、郷土における1つの記述の型ができあがったのだ。

**顕彰碑建立** くりかえし郷土の偉人伝のなかにとりあげられたそののちに、忠震の顕彰碑が、東京(1883年)、横浜(1982年)について、彼をわが郷里の出身者とみなすものたちによって新城につくられたのはようやく1986年のこととなった(以下、新城の岩瀬肥後守忠震顕彰之碑についてはtext8の『爽恢』1986年、による)。建立場所は、忠震の生家である設楽家の菩提寺の勝楽寺。建立者は岩瀬肥後守忠震顕彰会、撰文は国学院大学名誉教授の瀧川政次郎、また彼と親交がある徳川宗家にして神社本庁統理を務める徳川宗敬による題額「純忠」の文字が碑にはみえる。この二文字については、「あくまで幕府を中心にして、諸藩を糾合し全国的な新連合政権をめざし、開国を積極的におし進めた」岩瀬に徳川宗敬からおくられたとの解釈がある。徳川宗家からの贈りもの(しかも「純忠」の語!)をうけとめるにあたって、忠震の開国推進は幕府を超越した思想にもとづいていた(前出の松岡の理解)とはいえないだろう。「あくまで幕府を中心に

<sup>15)</sup>この『東郷ゆかりの岩瀬忠震公』は資料集『岩瀬忠震』(text10)の「設楽原の顕彰活動」で紹介された文献であるが、ほかでは参照されることもなく、いまのところ所蔵機関も不明である。小野田の名は『爽恢』(text8)所収の「岩瀬肥後守忠震顕彰碑建設資金寄付者芳名録」にみえず、このときすでに故人となっていた。小野田は1963年10月発行の『郷土』第29号(新城市郷土研究会)に「岩瀬忠震公の碑を訪れて」を寄せている。その文章を小野田は「郷土の生んだ幕末の偉傑岩瀬肥後守の頌碑が」と書きだしている。くりかえせば忠震は新城生まれではない。

して」、忠震の意思と行動はおこなわれたとの主張だ。

新城での忠震顕彰碑建碑を担った岩瀬肥後守忠震顕彰会の設立の経緯が、『爽恢』の「あとがき」に記録されている。安政の大獄で処罰されたものは、死罪となった吉田松陰、橋本左内、頼三樹三郎たちなど「それぞれ神にまつられたり手厚く顕彰され」たり、「他は復帰して新時代に活躍し」たりしているが、他方で忠震はというと、「わが郷土につながる偉人が、今や人々から忘れられようとしている」との危惧があり、これが顕彰会設立の動機となったという。発起人は、設楽家の家老職の家系を継ぐという滝川一美で、彼は顕彰会の会長である。その滝川が「岩瀬忠震顕彰碑の除幕に当たって」(前掲滝川ほか編『爽恢』所収)と題した文章を残している。

そこでは忠震顕彰への感慨が、「安政の対五か国修好通商条約の調印を成し遂げた〔中略〕救国の大恩人」であり、また「私たちの称えてやまない郷土の偉人」であるにもかかわらず、「この、日本開国の功労者岩瀬忠震が、彼の残した偉大な業績の割には、知名の人となっていないのを嘆」かざるをえず、東京と横浜にすでに碑があるとはいっても、「いささかの慰めとするところではありますが、もって足れりとするには、依然として程遠い思いがする」と表明されていた。子ども向けの郷土愛知の偉人伝に忠震の事績が載録されてから30年ちかくを経たところでようやく、その顕彰碑が愛知県内に建てられたのだった。

顕彰碑の碑文は、老中阿部正弘に抜擢された時点での忠震をすでに「開国論者」と評している。やがて、「大老井伊直弼意を決するや公(忠震)全権となり日米修好通商条約に調印し」、しかしのちには「將軍継嗣問題に触れ井伊大老に退けられる」とのとおり、碑文には忠震のいわば明暗が刻まれている。こうした忠震と直弼との関係は、「岩瀬忠震顕彰碑建立記念誌」である『爽恢』に収録された短文集の「素描・岩瀬忠震」では、より明瞭に直弼との緊張があらわされ、「岩瀬らの壮途を挫折させる役を担う井伊直弼が、溜間詰大名らの推薦によって大老に就任した」とその確執を予想させる記述をおいたり、あるいは、直弼暗殺を「因果応報というべきか」と判定したり、また、栗本鋤雲の記述にもとづいて、「井伊大老は、一橋派有司の中でも岩瀬を最も嫌っていた」と明かしたりと、郷土の偉人を顕彰するなかで、その忠震を処罰した直弼への攻撃を記しているかのようにみえる。その一方で、同じ「素描・岩瀬忠震」のなかの「井伊大老の登場」と題された一節では(この素描は節ごとに執筆者が異なる)、



だが井伊直弼の人間像について考えてみると、いわゆる「大獄」は後世責められて当然であるが、ともかく岩瀬忠震らをして日米条約を受結せしめ、ひいては、今日の日本繁栄の基礎固めをしたという事実は認められてよいことであろう。

との理解もみせている。郷土の偉人として忠震を仰ぎみるとき、直弼を排除したり悪として指弾したりする必要はなかったのである。忠震と直弼をならべて「開国」の実現者とあらわしてもよい。ただし、安政の大獄と桜田門外の変とのつながりが書かれることがあるし、なにより、忠震こそが条約締結のその場において条約文書に署名した幕吏として歴史に記録されればよいのだ。

こうした忠震という歴史の書き方も、「日米修好百年にあたり」といった特別な、記念すべき、歴史の区切りとなる、したがって、強烈に過去を想起するようなときには、いわば記述が膨らむこととなる。「幕末に於て、真に開国を決断した人は井伊大老ではなく郷土出身の外国奉行岩瀬忠震であった」と、細かな考察を抜きにした大まかな断定によって書かれてしまうのだ(滝川一美「日米修好百年にあたり岩瀬忠震を偲ぶ」『郷土』第17号、新城市郷土研究会、1960年10月)。「真に」といいうる「開国」の「決断」とは、どのように判定するのか、それは説明されていない。またくどくどと指摘するが、忠震は新城の出身者ではなかった。さらに微細な検証をすると、滝川がその主張の根拠としてあげている福地源一郎の記述(それは『幕末政治家』からの引用)「世間或は井伊大老を以って開国政治家の主動者の如く言ふものあるも、其の実を知らざるなり。当時幕吏中に於て豪も鎖国攘夷の臭気を帯びざりしは岩瀬一人にて堀田閣老をして開国を断行せしめたり」(傍点は引用者)の、傍点をつけた「開国」は、原文では「所信」となっている(『幕末政治家』岩波文庫版)<sup>16)</sup>。ただの誤記か意図を持った改竄なのか、それはわからない。

郷土の偉人とはだれか？それは愛知県小中学校の校長たちが考えるところでは、「郷土の」というばあいでも、そのひとの出生地は問わず、あるいは郷土生まれでないことを明かさず、ともかく、郷土にゆかりがあるひとであればよかった。そのひとの偉さをあらわす優れた業績とは、でっかい仕事や新しい歴史を切り開いたことだった。この偉大さや斬新さは、大きいほど新しいほどよいと

<sup>16)</sup>福地は同書で「条約調印断行を以て、井伊の発議に出たるがごとくにいうはけだし誤れり」「幕閣は依然たる鎖国主義なりき。しこうして井伊大老のごときに至りては、もとよりその主義にて」「井伊を以て開国の卓識者なりと称賛して置かざるものも、またその真情を通曉せざるの評なるのみ」とも記している。

なり、それがあらわされる歴史の領野もより広いほうがよいこととなる。大きさや新しさや広さは、現在の時点から計量され、こうした偉人伝の属性として、それぞれにより上位がもとめられてゆく。平時よりも激動の時代、村の歴史を書きかえる業績よりは世界につうずる日本史を切り開いた偉業が、郷土の偉人伝に記されてゆく。たとえば愛知県内の各地から均等に偉業を見つけようとするとき、村の日常において偉人がみつげられることもあるが、それだけではうまくないのだ。依然として国民国家(nation-state)の制約を十分に超えられていない現在のわたしたちの現実世界の認識法を過去に投影すると(しかもその過去は、国民国家の創成期だ)、最上級の偉業は国家(nation)をフィールドとして判定されることとなる。「開国」がその1つである。

## フィクションの効用

**光 芒** 愛知県小中学校長会による郷土の偉人伝は、そこに選ばれる人物が愛知県域の特定の場所に偏らないように配慮され、またできるだけ多くの人物をとりあげようとする心づもりからだろう、1巻に複数の人物伝が収録され、かつ全3巻や全10巻といった大部のシリーズとして刊行されてきた。その後、忠震単独の人物誌が新城で発行された。忠震顕彰碑が新城に建てられたり、新城市設楽原歴史資料館に忠震コーナーが常設されたりしたそののちに、忠震会から『光芒遙かなり 小説 岩瀬忠震』(1998年、text9)の書名で、みずから小説と掲げた書が刊行されたのである。347頁もの大著を執筆した岸上耿久は、愛知県豊橋市生まれ。同書の「序文 一閃の光芒」(忠震会初代会長滝川一美)によると、岸上は「法曹界ですでに名をなされた」ひとという。text8の「岩瀬肥後守忠震顕彰碑建設資金寄付者芳名録」にその名はみえない。

本書第1章「桜田門外の変拾遺」は、

「一大事でございます。今朝、大老の井伊様が桜田御門の前で……」 / わたくしはこれだけ申し上げるのがせいーばいで、後は肩で息をするばかりでした。

と書き始められる。こうしたはるかに遠い過去に溯ってそのときの会話を再現する書きようが、「小説」ということなのだろうか。だが、物語の展開のなかに、「と、『井伊直弼』(吉田常吉著、吉川弘文館)も書いているように」とか、『史談会速記録』(『幕末動乱の記録』八木昇編著、桃源

社)に、会津藩士の生々しい談話がある」といった典拠の明示が散見される書き方は、「小説」のスタイルからは逸脱しているようにみえるし、そうかといって、出典を1つひとつ示したからといって、冒頭の記述にみられる文体に明らかなように、これは論文ではない(典拠の提示もかなり曖昧ではある)。この忠震誌は、「わたくし」という一人称が物語る小説としてその展開が始められた。この「わたくし」という一人称語りの主体は、岐雲園の忠震に仕える新蔵というものだ、とようやく8頁でわかる。彼が桜田門外の出来事に強い関心を寄せるのも、「井伊大老といえば、主人岩瀬肥後守忠震(ただなり)に対し、禄を奪い、差控、謹慎という苛酷な運命に追いこんだ人物であると、彼は強く信じていたから」だと説かれる。この「わたくし」による物語りは、このあたり(8頁)での登場を最後に消えてしまう。この書は曖昧なスタイルで物語を展開するのである。

岸上の小説はまず、忠震を「苛酷な運命に追い込んだ人物」が直弼にほかならないと、忠震と直弼の対立を示し、そうした紛擾の結末として桜田門外の変があったと暗示しながらも、しかしその因果を考察することなく(「わたくし」に「これだけ(一大事が起こったこと)申上げるのがせいーばいで、後は肩で息をするばかりでした」と語らせている)物語り始めたのだった。

著者はみずから選んだ「小説」というスタイルを解説していない。忠震会初代会長の序文をみると、「性来の犀利な観察力・膨大な資料の考証力、そして真実の核心を浮き彫りにする構成力には、まことにもって素人ばなれをした、卓抜な力量を感じさせられるものがあります」とは、読むものが赤面する誉めようではある(「膨大な資料」を彼は読んだのだろう)。つづいて記された、「幕末の激動の時代を背景として、小説の体裁をとりつつまことに晴々とした史伝」となった、というあたりが、この書のスタイルをあらわしているだろう。「史伝」とはおおよそ共有された理解では、歴史と伝記、または、歴史上の記録にもとづいて書かれた伝記、となる。つぎにみる一書(『暁星』text11)とくらべると、本書はノンフィクションとしての史伝の書きようなのだが、散見される登場人物の台詞の挿入が、本書を「小説」と自己申告させたのだろうか。不思議な書物だ。

第1章「桜田門外の変拾遺」はその1で、さきにもみたとおり、桜田門外での出来事がもたらしたことから、忠震と直弼とのかかわり、直弼暗殺になにもいわない忠震(しかしのちに忠震の墓碑を建てる白野夏雲には「大老思い知ったか」と語らせている)、「悲運のうちに生涯を閉じ」たという忠震の末期、を記しながら、その2では岩瀬家と設楽家の家系を溯る記述となり、それを読ん

でも、桜田門外の出来事とも、忠震の「光芒」ともまるでかわりを見出せない節がおかれている。第2章「岩瀬忠震の出生」では、さきに登場した忠震に仕える新蔵の履歴や、幼少の忠震が聞いた設楽に伝わる伝承があれこれと書かれる（忠震が江戸生まれであることは書かれない）。第3章「師弟の縁」では、はやくも忠震没後のことが書かれ、さきにふれた白野による「顕彰碑建立」、白野の維新後の履歴が伝えられる。そして第4章でやっと、本題の始まりといってよいはずの、「黒船来航」となる。

章の冒頭で、嘉永6年6月3日に「相模湾に米国東印度艦隊が姿を現わした」と記すと、そこから、オランダ風説書、モリソン号事件、渡辺華山や高野長英、といったことがらに時間が溯られ、さらに、武家諸法度、鎖国令、島原の乱など江戸時代初期へと記述が転移する。この小説では時間の推移が一定していない。ときに時間を溯游し、ときに遡及する書き方である。読むものに不安定な印象を与える構成だ。ともかく読みすすめてゆくとようやく、章題にふさわしい内容として、直弼が登場し、彦根藩による海防警備と直弼の意見書に言及される。

ふたたび忠震の名がみえるのは、第5章「お台場の風」で冒頭から登場していた老中阿部正弘の人材登用の場面（その2）となる。台場築造にかかわる忠震と正弘の会話も描かれる。ここでは、「鎖国というものは既に過去のものでございます」と老中に話す忠震の台詞もみえる。そして海防掛に登用され、しかも「岩瀬が外交についていかに重要な人物であったかを物語る」根拠たる文章が、松岡の『岩瀬忠震』の一節となる（第6章「玉楠の木」その2）。

その後の忠震の業績として多くの忠震伝がふれる安政4年11月6日付上申書は、第9章「横浜開港建言」でとりあげられる。ここでは、上申書執筆の具体相が再現され（もちろんフィクション）、上申書の引用は松岡の『岩瀬忠震』からおこなわれ<sup>17)</sup>、その評価についても前掲石井『港都横浜の誕生』から引用されている。著者岸上の考察は、「岩瀬の熱情は遂には曲折はあったが横浜開港を実現する。その横浜開港への道はこの時定まったといえよう」となる。そして、ハリスとの交渉へと場面はかわる。

第11章「開国始末」は、「井伊直弼の大老就任」で幕を開ける。岸上はつぎのように記す。

<sup>17)</sup>ここでもさきにつづいてまた松岡の『岩瀬忠震』がもちいられている。研究者の論文であれば、いわゆる孫引きとして注意される所為だが、松岡（あるいは忠震会）からすれば、忠震を書くときに松岡の書は参照すべき、かつ引用すべき重要な顕彰誌だということかもしれない。

井伊の大老就任に海防掛が反対した話が伝えられている。岩瀬は永井、鶴殿等と共に老中達に云った。斯様な難局にあたり老中の上に権威のある人物を挙用するのは至当だが井伊がどうして此の難局を打開することができようか。井伊を大老に挙げたのは如何なる趣意であろうかと詰問した

ついで、老中堀田の処遇をめぐって、「井伊の専権圧制の政治は早くもその萌芽をみるようになった」とも書く。將軍継嗣問題についてかわされた忠震と直弼の「激論」があったことも示された。忠震と直弼をめぐるクライマックスとなる条約調印の即時断行か引き延ばしかをめぐる議論の場も、忠震、清直、直弼の三者のあいだでねちねちとくりひろげられた、とみせられる。直弼は低く聞こえにくい声で話したかとおもうと、「大老であると同時に、大藩を自任する近江彦根藩三十五万石の当主としての風格をみせたもので、奉行や目付などの下僚何するものぞといった余裕を感じさせた」「落ち着いた口調」で告げるといふぐあいだ。そして、

井上は言葉は静かながら目をすえて云った。「両名において延期方につき、若しも万策尽きましたる節は、調印はやむを得ぬものと考えてよろしゅうござりましょうや」岩瀬と井上は井伊の顔をまっ直ににらみつけるようにしていた。ふたりの気迫に井伊は思わずたじろぐ気がした。「されば、万やむを得ざる場合は調印も致し方あるまい」井伊がそう云った時、間髪を入れず岩瀬が念を押すように云った。「われ等必死の応接も万策尽きましたる節は、調印も致し方ござりませぬな」まるで刀を振り下ろすような調子だった。井伊は唇をゆがめ吐き捨てるように云った。「くだい！」

全権の二名が大老から調印の言質をとったという場面だ。本稿でみるいくつものテキストのなかで、もっとも切迫度の高い忠震と直弼の対面の場となっている。

著者の岸上はここで、『井伊家公用方秘録』と『井伊家秘書収録』によって、条約調印拒絶により戦端が開かれて敗戦となるよりも、違勅の罪を一身にうけるとの直弼の意思や、やむをえず調印するとの「井伊の決意」を示している<sup>18)</sup>。他方で、『開国始末弁妄』をあげて、「固陋頑迂」な直弼は「開港を忌」み、調印は「松平伊賀の果斷」だと、その功績を井伊に認めない見方もあるという。後者についてはなお、同書につけられた朝倉治彦の「解説」も引用して、『開国始末弁

<sup>18)</sup>近年の研究ではこの「決意」に疑義が示されている(母利美和『井伊直弼』幕末維新の個性 6、吉川弘文館、2006年、彦根藩資料調査研究委員会編『史料 公用方秘録』彦根城博物館叢書 7、サンライズ出版、2007年、を参照)。

妄』の著者である内藤耻叟は、直弼の功績を讃える島田三郎の『開国始末』を批判するために、かつて「水戸学を学び、弘道館教授を歴任した内藤は大日本史以来の考証主義、実証主義の伝統を受け継い(で、中略)島田への批判と、水戸藩の弁明書」(引用部)としてその著を執筆したともみせている<sup>19)</sup>。そのあとに、調印の場面、ハリスの感慨、忠震の「虚脱感」や「寂寥」といった心象風景をはさんで、福地の『幕末政治家』、『懐往事談』から引用をおこなって、勅許のないまま条約調印を断行するとの主張とその実行力を忠震に帰している。5 か国との条約調印、作事奉行への「左遷」を書いたのちに、岸上は、忠震の感慨をあらわしてこの第 11 章を閉じた。それは、

だが、岩瀬の胸底には何かわだかまるものがあつた。それは、左遷という程度の処分済まされる筈はない、という予感であつた。

という暗転への気配の自覚である。

第 11 章はその章題が「開国始末」と掲げられながらも、島田三郎が「井伊掃部頭直弼伝」の副題をつけて執筆した『開国始末』(輿論社、1888 年)には、『開国始末弁妄』の解説をとおしてふれるだけで、そこからの引用はおこなっていないし、それを参照したうえでの記述もみあたらない。島田は、「一切の想像を擯けて悉く事実に憑拠する」(『開国始末』「緒言」)ことをうたって直弼の「史伝」を書こうとした。岸上なりに、開国をめぐる始まりとその終わりを記したのだろうが、島田の直弼伝と内藤の著作とには、後者が前者を批判したとの関係があると示されながら<sup>20)</sup>、その後者だけをとりあげたその書き方をめぐる著者の判断は示されていない。筋をおえば、『井伊家公用方秘録』など直弼側の史料のつぎに、島田による直弼伝のでたらめぶりを暴露する(「弁妄」)と掲げた内藤の書をおくのだから、これは直弼に開港の功績を認めずに、したがって忠震を開港の功労者とする記述となる。そのうえで、忠震のところに引かかる<sup>つか</sup>痞えが大きく忤度されたのだった。それはまるで、小説作者みずからのここでの記述への、懐疑や躊躇をあらわすかのようにもみえてしまう。それというのも、次章がまた直弼をあらわす章題となっているからなのだ。

<sup>19)</sup>著者はおそらく内藤の著書を『戊辰始末、安政紀事』(幕末維新史料叢書 6、人物往来社、1968 年。朝倉治彦「解説」所収)でみたのだろう。内藤の「開国始末弁妄」はその『開国起原安政紀事』(東涯堂、1888 年)の「附」である。

<sup>20)</sup>この島田の『開国始末』をめぐっては、べつに論じる予定。

つぎの第 12 章は、「彦根屏風」と題され、「安政の大獄は、水戸家への密勅降下と九条閑白辞任問題をきっかけとして起されたといわれる」と始まる。ここで直弼の「怒り」や「危機感」による「大獄という忌わしい名を史上に残した大量逮捕事件」が記されてゆく。ふたたび『安政紀事』によって、「大獄の結末は世に知られた通り、苛酷を極めた裁判によって終わったが、極刑はすべて井伊の専決によって定められたと伝えられる」と書いている。

一転場面は、開港場を神奈川とするか横浜とするかの議論が示され、さらに転じて、『国宝大辞典、一、絵画』によって彦根屏風を示し、「こうした優美な芸術品を愛する心根を持った井伊に安政の大獄を生む素地がどこにあったのか」と大分前のことで記憶もうすれたが、これはたしか、吉川英治氏を書いておられたのを見た覚がある」と述べて、さらに直弼の履歴へと記述を移す。14 男という出生、埋木舎での部屋住み、養子、そして 13 代藩主と直弼について書かれるときの 1 つの型にそった記述にほかならない。直弼の和歌、茶道、居合(これらは「文化人」としての直弼の表現となる)、長野主膳との邂逅(これはときに国学への傾倒や尊王の意思をあらわすばあいがある)もまた定番。井伊家の歴史をたどれば、「藩祖以来、こうした徳川家至上主義の血は井伊家に代々流れて直弼に及」び、安政の大獄も「藩祖以来の遺訓に殉じた」行為と説かれる。そして、直弼の死、彦根藩での長野たちの粛清、彦根藩への処罰が伝えられる。

第 12 章の最終節には、1967 年と 1968 年に刊行された『井伊家史料幕末風聞探索書』全 3 巻(井伊正弘編、雄山閣)「序」からの引用がある(編者の正弘は直弼の曾孫。また井伊大老史実研究会会員という)。そこでは、直弼没後の彦根藩のようす、いずれ直弼の「冤罪」をはらすためにも「当時の真相を物語る記録類だけは後世に伝え」ようとしたこと、薩長史観によるであろう維新史の調査研究のためには史料を提供しなかったこと、戦後になり民主主義と言論自由の時代が到来し、「井伊直弼に対する朝敵意識も急速に薄らぎ、昨今ではその事蹟も冷静に見直そうという風潮が起こりはじめるに至った」ので、「井伊家に収集され保存されて来た史料の中から、風聞書ならびにこれに関連のあるもの一切を取捨選択することなしに網羅してここに収録した」と、同書編纂の経緯と目的が示されている。かさねて岸上は、「とに角、事実一つしかなかったのである」との正弘の言を引用している。また、井伊大老史実研究会会員の末松修が同書に寄せた「解説」からは、立場や見方の違いと歴史の書き方をめぐる主張が引用されている(なお、岸

上の引用はその表記の仕方をめぐっていずれも正確ではないが、そのままとした)。

たとえその立場や考えの相違から、お互いが正反対の言動をとったにしても皆でひとしくこの非常時により賢明な、より合理的な方策を信じて死力を尽くしたのであって、成功した一方だけが正しく、他の一方は常に無誠意であり、不正であったと極めつけてしまうことは歴史より講談というべきであろう。幕末維新史に関しては未だにこの講釈的偏見の多いことよ

ついで、同書から忠震について、「大獄の容疑者として狙われていたことは明白」であることを示す探索報告の一部が引用され、家族のまえでの忠震処罰の情景が物語られる。

著者の岸上は、ながながと『井伊家史料幕末風聞探索書』を参照しながら、それとのかかわりで忠震について書いた箇所はそう多くはなかった。章題が「彦根屏風」となった第 12 章では、そのまえの章とは一転して、直弼や彦根藩、さらにそれらの系譜を継ぐものの位置からの幕末史と、文字数からいえばそれを上回る紙幅を割いて、その歴史の見方が示されている。ひとの怒りと審美のつながりをめぐる問い、事実が1つであるとの確信、成功が正であり失敗を不正とする観点の否認、を著者の岸上はこの章で提示したのである。第 11 章と第 12 章は、みずから設定した小説というスタイルとは違って、歴史の見方や書き方についての評論となったのだ。

「雪の節句」と題された第 13 章では、岐雲園で過す忠震がよくみた「夢」が読者にみせられる。そこでは咸臨丸やポーハタン号がみえていた。そして日は3月3日、新蔵が「井伊大老に何か大事が起った(中略)桜田門で何か大事が起きたらしい」と聞いたと記す(ここで冒頭の記述につながる)。第 14 章「翔(と)べない鷗」では、「忠震にとって、あの、横浜開港建言が実現したともいえる横浜開港は、まさに夢の実現だった」と、開港場横浜の情景に読者を導いてゆく。「岩瀬にとって、格別感慨を深くする場所が横浜にはある。本覚寺である」との横浜案内も、この章にはある。忠震は書簡に「病鷗」と自署したこともあったという。この小説は、忠震の没後の追悼から顕彰のようすまで、またゆかりの人びとのその後、岐雲園のその後までも記して、本書の記述を終えている。

岸上が編んだ小説は、よくいえば、「素人ばなれをした」その博識さを縦横無尽に展開する「卓抜な力量」によって書かれた忠震誌となろうが、他方でこれは、いわゆる脱線の多い、おもちゃ箱をひっくりかえしたような、相互に記述が関連しあわないところのある滅裂な断簡ともいえる。忠震



会初代会長の滝川も、岸上が「真実の核心を浮き彫り」にしたというのなら、その「真実の核心」とはなんだったのかを、読者にわかるように明示してみせればよかったのだ。この小説があらわしたという「真実の核心」がなにか、わたしにはわからなかった。なぜ、岸上が忠震会発行の忠震伝を執筆することとなったのか、なぜその書が「小説」と銘打たれたのか、それもわからない。憶測をたくましくすれば、「法曹界ですでに名をなされた」郷土生まれの偉人によって忠震を書いてももらいたいとの願いがかなったともみえる。本書はその組み立ても、執筆経緯もよくわからない、読むわたしにいくつもの疑問を生じさせてしまう書なのだった。

そうした不思議さがあってもこの書は、岸上が読んだであろう「膨大な資料」のいくつかを小説のなかに登場させて、その資料、べつにいえば文献をして、読むものに問いを発せさせる可能性を秘めている。その文献は、『井伊家公用方秘録』、『開国始末』、『開国始末弁妄』、そして現代の『井伊家史料幕末風聞探索書』である。不満をいえば、著者はみずから示した文献をふまえた、史料のあいだに生じてくる事象というべきものをとらえていない。他方でよくいえば、歴史の資料をつきあわせていけば、どうにも問わずにいらなくなることもある、そのことを読者に示したのである。

本書で著者の岸上は、忠震と直弼が対峙する場面(ここには清直もいたが)で、直弼に「くだい！」といわせるほどの緊張を書き込んでいた。もっとも緊迫したその場面にあらわした忠震と直弼の対抗や、直弼の人物像が現在に到るまでどのようにみられてきたのかを知る手がかりや、それを考える材料(歴史資料)を提示して、読むものに学習の機会を提供した教科書としてこの小説は読めるのである。

**暁星** 森健次の『暁星』(2001年、text11)は、その物語を黒船来航から始めている(表紙も黒船とおそらく日の出の合成写真)。著者は愛知県一宮市に生まれ、のちに横浜市立大学を卒業している(「著者略歴」)。森は学生時代にしばしば横浜の神奈川県立音楽堂へいき、そのちかくの掃部山公園に立っている直弼銅像を「おりおり目にした」との体験を記している。くりかえし銅像をみた「そんな記憶から、横浜開港の功労者はてっきり井伊直弼だと思い続けていた」森が、「しかし、実は横浜開港の功労者は井伊直弼ではなく、別の人物であることを知ったのは、ずっとのちのことだった」。愛知県で生まれ、横浜の大学にかよい、また愛知県で就職した著者は、設

楽原の歴史資料館へいったことがあった。そこには忠震の常設展示がある。

その岩瀬忠震こそ、日本の開国をすすめる、横浜開港の功労者というべき人物なのである。忠震はこの設楽ヶ原一帯の六ヶ村を領有する設楽家に生まれており、忠震を慕う地元の人たちによって忠震の顕彰会までできている。ノ遊学の地横浜と、郷里であり、長年たずきをたててきた愛知。この二つの土地に所縁のある岩瀬忠震が近代日本の黎明期にどのような足跡を残してきたのかと、強い関心を覚えたのが本書を書くきっかけである。

このように著者みずから「あとがき」に執筆動機を記したとおり、彼にとっては、郷里と第二の故郷ともいえる2つの地にゆかりのある人物として忠震がいたのである。直弼と横浜をめぐる記憶が銅像によってかたちづかれ、忠震についての知識を展示から学習したと述べるところに、記念碑でもある銅像や歴史資料館という教育機関の効果があらわれていて、おもしろい証言として読める「あとがき」となっている。1935年生れの著者は、1954年の開国百年祭を在学中の横浜で体験していた可能性がある。そうすると、建立したての二代目直弼銅像をみていたのかもしれない。一方、設楽原歴史資料館で始まった当初の忠震コーナーは、同館発行の資料集(text10)のように、「忠震のスケッチ」「設楽家の歴史」「忠震の生涯」といった構成の展示になっていたのだろうか。

ここで、新城市設楽原歴史資料館が資料集として発行した『岩瀬忠震』(text10)をみておこう。本書目次のつぎの頁では、「ようこそ 設楽原歴史資料館へ」と題され市長名で「〔忠震の〕ゆかりのまち“新城”へようこそおいで下さいました」と記されているので、この資料集の内容を、刊行当時の歴史資料館の展示とみることも可能かもしれない<sup>21)</sup>。2つのテーマで構成されたtext10所収の「忠震のスケッチ」は、そのうちの1つのテーマが「開国の星」と題され、

幕末、ひたひたと寄せる開国の波打ち際をひたすらに駆け抜けた一人の先覚者がありました。ノこ

<sup>21)</sup>この市長名のあいさつにあたる文章では、忠震が安政5か国条約の「すべての調印者」となったことが書かれているが、「この岩瀬忠震は新城の設楽6か村の領主の3男でした」と教えるだけで、忠震が江戸生まれであったことは知らされない(もっとも同書「忠震の生涯」の章の「生い立ちと若き忠震」では書かれるのだが、それは14頁にまですまなくてはならない。本書は全37頁の小冊子)。また本書表紙写真の古い家屋は「設楽家の家老滝川家長屋門」なのだ。もはや設楽の家屋は残っていなかったのか。この滝川は前出の忠震顕彰会初代会長滝川一美の家である。

こ設楽六ヶ村の領主設楽貞丈の三男で岩瀬家の養子となった岩瀬忠震でした。

とまとめられ、島崎藤村の『夜明け前』を引用しながら、「忠震の人物・功績を高く評価」されているとともに、「一転して訪れた忠震の悲劇をも伝えている」とのようすを披露している。忠震が活動した場合は、「200 余年続いた日本の鎖国制度が、否応なく世界貿易の中に取り込まれていく大きな時代の渦」と喩えられ、「幕末の苦悩も、忠震の苦衷も、その中であった」との時代観を資料館の資料集はあらわしていた。渦、苦悩、苦衷といったかならずしも正ではなくむしろ負をあらわすといつてよい語がならぶなかで、忠震こそがそれらを跳ねかえした「開国の星」と輝くのだとみせられるのである（前出のとおり「開国の灯」という暗喩もあった）。このテーマは、「幕末の三俊」と「日米修好 100 年と忠震」の 2 つに分けられ、前者ではすでにみた川崎や福地の著作を参照するなどして、「岩瀬が非凡の逸材であったことは間違いない」と告げ、後者ではさきにもた『郷土』に掲載された滝川の文章を転載して、「郷土出身」の忠震が「崇敬」されるようすを示している。

もう 1 つのテーマ「横浜開港の恩人」は、

先の見えない大転換期の中で、岩瀬忠震は次の時代の姿を、しっかりと見つめていました。/ 安政年間、アメリカ総領事ハリスが幕府へ出した要求に対して、横浜開港を主張した唯一の意見書を忠震が書きました。

と紹介されていた。ここではまず、『横浜市史』によって「横浜開港の主唱者として、横浜開港史のうえに、どうしても名を落とすことのできない人物は、目付岩瀬忠震である」がしかし、「横浜が開港された時、開国論者で幕政改革派であった忠震は、安政の大獄により、すでに左遷の身であった。そしてその 2 か月後には永蟄居の処罰を受けている」と、忠震はその生涯をとおしてみずからの栄と没とを示したということなのだろう。このテーマは、「開国・開港論と目付忠震」「忠震から老中への上申書」「横浜開港」の 3 つに分けられて、幕末外国関係文書と福地の『幕末政治家』が史料として、その解釈が『横浜市史』によって示されている。

ここで 1 つ、史料の引用に注目しよう。「忠震から老中への上申書」のところでは、横浜開港の首唱者忠震をあらわすときにはかならずといつてよいほど参照される上申書が引用され、ここではそのまえに、「幕末外国関係文書十四」を典拠とした、忠震が同僚に送ったという文書にみえる横浜開港論が示されている。東京帝国大学編『大日本古文書 幕末外国関係文書之十四』

(東京帝国大学文学部史料編纂掛、1922年)には、安政3年3月から8月までの文書が収められている。そうすると、前出の松岡が忠震によると推測した安政4年3月の「積極的開国方針」の主張よりもさらに溯った時期に、忠震が開港場の候補地として横浜をあげていたこととなる。本書は、松岡の著書(text5、1981年)はもとより、横浜での忠震顕彰の書(text4、1980年、など)よりもあとに刊行されたのだから、しかも「忠震の顕彰」の章では、横浜の「横浜開港首唱者顕彰碑」(もちろん忠震顕彰碑)を写真入りで紹介しているのだから、いつの時点で忠震が横浜開港を主張したのかを明らかにする課題や、だれが横浜開港の首唱者なのかをめぐる論争があったことは知っていてもよい。しかし、この資料集は幕末外国関係文書之十四に収録された史料をもとに、忠震が横浜開港を最初に唱えた幕臣だと宣伝してはいない。これはどうしたことだろうか。

ことの決着のつけようはかんたんだ。さきの史料の出典は、幕末外国関係文書之十四ではなく十八、書かれたのは安政3年ではなく安政4年だった。単純な書き違いではある。「岩瀬忠震」(text10)編集者や歴史資料館展示作成者は、忠震の主張が最初か否かに関心がなかったのかもしれない。そうであれば、誤記も気にならなかったのかもしれない。だが、横浜の忠震顕彰者がこのあたりの記述を注意深く読んだのなら、忠震はすでに安政3年に横浜開港を主張していた、その首唱者だったのだ、と雀躍したことだろう(もっとも、たぶん気づかれなかったのだが)。では、最初ではなくても唯一なのか。これまたすでに松岡が指摘したとおり、横浜開港を主張した、大目付、御目付が老中に上申した文書が、忠震上申書よりもまえにすでにあったのだから、忠震の主張が唯一でもなかった。

誤記という過誤があったとはいえ、ともかくこのテキストは、資料集として(かつおそらく展示解説書として)、忠震を記すときのその観点をまず明示して(それは開国と開港)、忠震の生涯をたどり、いずれも史料を引用したり提示したりしながら記述したところに、資料館がおこなう事業の公共性や実証性、ひいては正しさを表明したこととなる。くわえて、忠震顕彰の軌跡(したがって、忠震没後の忠震の見方や書き方)も提示したところに、この資料集の意義がある。この資料集と展示内容がそうかわらないといえるのなら、ここに示された忠震の歴史が、あらたに忠震の伝記を書く決意をひとに与えたのだし、しかもその動機には、かつて自分が知ってしまった、あるいは

知らされてしまった歴史の 修正 がふくまれていたのだ。

さて、森の著書にもどると、くりかえせば、彼が実際にみた直弼銅像と歴史展示(しかも、彼にとっては銅像のもたらした印象が展示によって正されたのだ)による衝き動かしが 1 つの動機となつて、「開国の扉を開けた幕吏・岩瀬忠震」(副題)の物語が書かれたのである。本書での忠震登場は、「壱 黒船来航」の第 1 節「黒船来航」の第 2 項となる(13 頁)。

江戸湯島にある昌平校の教授控え室に、岩瀬忠震が講義を終えて戻ってきた。/「浦賀に来ていた黒船の一艘が、昨日は神奈川沖までやってきたとのことだ」〔中略〕/同僚たちが黒船を話題にして、大声で会話していた。/〔中略〕忠震は異国船が浦賀までやって来ていることを知っていたが、それが神奈川沖まで近付いたとは初耳だった。だが、さほど驚かなかった。

というぐあいだ。史実をふまえながらもフィクショナルな場面と展開を描く、いわゆる歴史小説というつもりで著者は書いたのだらう(著者は自己の著作のジャンルを示していない)<sup>22)</sup>。さきにみた小説(text9)にくらべて、史料の引用はなく(忠震の漢詩をみせているが)、参照史料の典拠が示されることもない(巻末に参考文献があがっているが)。忠震などの登場人物の思い、ことば、行動と、そして本書冒頭の記述 「嘉永六年(一八五三)六月三日、相模国浦賀の沖に異国船四艘が姿を現した」 にあらわれているとおり、当時の出来事を歴史として記すもの、そして、「十九世紀に入り、欧米列国において資本主義が進展すると、列国は市場を隷属的に確保しようと、植民地支配の触手を東洋に延ばしてきた」という記述にあるとおり、歴史を解釈するもの、の 2 者もここには登場している。この歴史小説は、当時の出来事を歴史として記すものと、歴史を解釈するものによって、物語の配役と台詞と登場の時間が決められるのである。

老中阿部による忠震の抜擢、下田でのプチャーチンとの交渉に同席して外交を学んだこと、そしてハリスとの交易についての交渉が始まったところで、老中堀田に「開国は不可避だと思いますよ」と、「積極的な開国論を説いた」忠震を描く。老中阿部の没後、長崎からの帰路、「日本の開国を確信した」〔中略〕忠震は、開国にあたって自分の意見を幕閣に上申すべく、すぐさま筆を走らせ、その忠震の「上申文」 本稿でもくりかえし言及したくだんの文書の内容を記す。

<sup>22)</sup> 国立国会図書館での分類は 913.6 だから日本文学の小説・物語となる。

開港場として整備するは横浜である。横浜こそ交易の中心地として最適の地である。/(中略)横浜を開港し、外国と自由に貿易を進めることこそが、これからの日本の取るべき最善の方策である。

これが忠震の開国論、横浜開港論である。忠震は、「日本の開国と横浜の開港を理路整然と説いた上申文を一気に書き上げると、胸の高ぶりを抑えきれず、その夜はなかなか眠りにつかなかった」と、その心情、それが身体におよぼした力も描写された。

全権となった忠震がハリスとの交渉をくりかえす、そして、条約原案の作成と提示、そこでの「富国強兵をはかり、ゆくゆく日本を五大州第一の国にいたさなければなりません」という国家の大計の主張、堀田との上京による朝廷交渉の不首尾、を記したところで、初めて直弼が登場する。

彦根藩主の井伊直弼は、幕府の面子にかけても勅許を得なければならないと思い、堀田正睦を助けるために腹心の長野主膳を上京させた。

ついで、將軍継嗣問題へと記述は移り、直弼が南紀派であること、忠震は「英明な一橋慶喜が將軍の継嗣になるべきだと考えていた」と知らされる。「事態は二転三転した」ところで、「井伊直弼の思い通り、継嗣は誰でもいいこととなり、幕府の自由な選択に任せられた(中略) / 「年端もいかぬ幼君を將軍に立てて、彦根の赤牛め(直弼)が、思うがままに操縦するつもりなのだ」 / 「日本の歴史始まって以来、最大の難局を迎えているというのに、英明な主君を戴かずして乗り切ることができるものか」 / (中略)「思い切った改革を計らねば、日本は夷国によって滅ぼされてしまうのだぞ」 / 「かくなれば、陋習を破って突き進んでいくしかない」と、どれが忠震のことばなのかは曖昧に混ぜこぜにされながら、ともかく彼の改革への決意が示されたのだった。

そして、本書のさわりとなるであろう「通商条約調印」の章となる。直弼が大老となる。それを聞いた忠震は、「耳を疑った」。忠震は「井伊直弼を眼識、手腕なき人物と見ていて、大老職に充てるべきでないと思っていた」からの驚きだった。ここで、直弼の紹介がおこなわれ、

井伊直弼は彦根藩十一代藩主直中の十四男で、長らく三百俵の扶持米を得るのみで不遇をかこっていたが、三十三歳のとき、兄である十二代藩主直亮の養嗣子となり、三十六歳で十三代藩主の座についた。溜間詰を代表する大名となり、大老に就いたこのときは四十四歳だった。

と示されると、家格の違いがあるにせよ、すでに同書 16 頁で、「昌平校塾生の中で、忠震の学才

は一頭地を抜くものがあった」と二十歳台のときからの俊才ぶりが紹介されていた忠震とくらべると(他方で忠震も直弼と同じ部屋住みの時期があった)、その才において、直弼のほうが分が悪くみえることとなる。さきの直弼の披露のすぐあとに、当然のように、「老中の理不尽な弁解〔直弼大老就任についての〕に忠震ら目付たちは、ますます怒りを募らせた」とも書かれ、読むものが忠震と直弼との対抗を予想できる記述となったのだった。

一方、直弼はというと、「大老職に就いた井伊直弼は、その日から辣腕をふるい始めた。忠震らが凡庸と見ていた直弼とはまるで別人の行動だった」というように、辣腕や非凡庸という形容は直弼の側からの記述が始まったことをあらわしている。將軍継嗣問題の決着、一橋派の粛清こうなったところで、忠震は、「早晚、自分も井伊大老によって断罪されるであろう」と思量し、そしてその説明が「これまで忠震は直弼となにかにつけて対立してきた。直弼にとって忠震は実に小癩な、いわば咽喉につかえた小骨のようなものだった」と記される。だがまた、「ハリスとの交渉が残っており、ここで処罰するわけにはいかなかった」とも説かれるのだった。直弼からみた、直弼にとっての、忠震が描かれている。

江戸湾小柴沖まで進航してきたハリスが条約調印を急がせる、幕閣による評議がおこなわれるという展開のなかで、「大老井伊直弼が(松平)忠固の主張した即時調印に強い口調で反論した」、「直弼は強硬に調印の延期を主張していたが、内心では激しく葛藤していた」と直弼のようすがその内面までもが明かされたうえで記され、

大勢は即時調印もやむなしという意見に傾いていた。延期派は井伊直弼と本多忠徳の二人ぐらいのものだった。ノしかし、少数意見ではあるが大老の井伊直弼がなかなか自説を引っ込めないの  
で、いつになっても評議に結論が出なかった。

との膠着となる。評議後に、全権の忠震と井上清直に調印は勅許後との延期を伝える直弼  
「なお勅許に拘っている直弼に忠震は呆れる思い」 直弼に詰め寄る清直 「しばらくため  
らったが、腹を括って答えた」直弼は、「やむをえない事態となれば、そのさいはいたしかたなか  
う。だが、極力、引き延ばすように努力せよ。引き延ばすようにな」とふたりに告げると、それは「二  
人には、直弼の返答は調印承認を意味していた」と解釈された 条約調印直前の緊迫した  
場面が描かれた。

忠震は小躍りしたい気持ちだった。 / さすが信濃(井上清直)殿。 / 忠震は井伊直弼から巧みに言質を取った井上清直の才知に感心した。 / 部屋を出て清直の顔を見やると会心の笑みを浮かべており、してやったりという心情がありありと窺えた。

大老からの言質を引きだしたクライマックスである。

その後「違勅調印」の章となり、老中罷免、水戸の徳川斉昭たちの不時登城とその処分とつづくなかで、忠震も「いつ直弼に呼ばれて処分されてもいいと、覚悟を決めていた」のだが、「いまや忠震は幕府で外交上欠かせない人材となっていた」こと、「真っ向から対立する忠震を大老井伊直弼は嫌悪していたが、この時期忠震を外国奉行から外すことができなかった」ことが、直弼の観点から解説される。だが、条約調印がすべて完了すると、忠震は外国奉行から作事奉行へと異動となる。左遷である。直弼と忠震との確執、正確には直弼による忠震の排除は、この場面でもっとも緊張度が高く記されている

大老井伊直弼とは意見が合わず、ことあるごとに対立してきた。とりわけ將軍の継嗣問題では一橋慶喜擁立を強く叫んできたので、直弼は忠震を一橋派の幕吏の中で最も嫌っていた。 / 「小身者の分際で、出過ぎたことをする奴め。その罪は、身首を異にすべきだが、今は国家の一大事にあたらせているので許しているまでじゃ」 / 直弼がそんなことをいっているという噂を、忠震は耳にしたことがあった。

と解職(左遷)の場では、時間を溯って忠震嫌いの直弼が詳細に描かれた。忠震にとっては不遇の始まりとなる転換の場面にふさわしく、背景には秋霖の雨音が記されている。その忠震は、「日本を開国に導くことができたのだ」との感慨をもらした、と記されたのだった。ここで「参 勅許失敗」が終り、最終章の「肆 永蟄居」へと移る。

最終章は、安政の大獄と桜田門外の変がそのおもな内容となる。章題にあるとおり、忠震は永蟄居となる、その処分をくださった直弼の訃報を聞いたところで、「権力にまかせて世を制しようとした独裁者の最後はかかるものか。 / 忠震は井伊直弼の死を意外に冷静な心情で受け止めた」とまとめられた。忠震と直弼との「対立」は、ほとんど直弼の位置から書かれていた。直弼の大老就任への抗議をおこなった忠震のそれは、「老中の理不尽な弁解」に向けられていた。直弼の死を忠震が「冷静な心情で受け止めた」ことを「意外に」と書いてみせたのは、両者のあいだには



直弼の側からの一方性の対立があったのだと、あらためて読者に伝える警告となったのだ(もっとも両者は対等ではないのだが)。

罹病した忠震の衰弱が知らされる。連日猛暑の真夏だという。忠震の「夢路」が綴られる。「忠震は鷗に化身して海上を飛んでいた」のだ。この変身は彼の雅号「鷗所」(鷗処とも)によるのだろう。忠震は、「憧れ続けていた海外渡航を果たし、また江戸や横浜の上空を飛ぶなかで、真上からは真夏の太陽に、真下からも海の照り返しに照らされて、「熱い。熱い。熱さで翼が焼け失せそうだ。/(中略)翼が。翼が。ああ、翼がもぎ取られ、きりもみして落ちていく。ああ、ああ……」とことばにつづいて、その死が告げられた。

その後の記述は、「忠震の死後、日本は激動する」に始まり、明治維新で終幕となる。最後の4行は、

忠震がこじ開けた重い鎖国の扉の門口から世界と交わる道が拓け、日本は近代国家として旅立っていったのである。/近代日本の夜明け前、暗闇のなかに瞬時の光彩を放ち、たちまち歴史の陰に消えていった明星、それが岩瀬忠震だった。

で281頁の歴史小説の終わりとなった。

森のこの著作は、ほぼ時間の流れに沿った溯游法で記され、その展開が一筋に読める物語となっていた。書名の「暁星」は掉尾の記述(ここでは「明星」だが)に明らかとなり、それは忠震をあらわして、日本の近代=明治を夜明けととらえる立場からは近世=江戸時代が暗黒となり、そこにあって輝きを放っていた忠震がこの物語の主演であることは、あたりまえにすぎる本書の約束事となっていた。「開国の扉を開けた」(本書副題)ことは歴史のなかで是と評価できる業績であり、それは幕臣でありながらひとり忠震が担ったがゆえに、また、「開国」を主動した功績を彼が自覚していた(と描かれた)ので、彼に「暁星」の称号が与えられたのだ。だが、彼は落ちた鷗に喩えられてしまう。「暁星」の光は瞬時にとどまり、すぐに「歴史の陰」に消えていったと書かれてしまう。

森の物語では、忠震にならべる人物は、老中阿部正弘や堀田正睦でも条約調印の同役の井上清直でもなく、それは直弼にほかならなかった。それはさきに見た岸上の小説でも同じだった。森は、忠震と直弼のあいだの対立を、直弼一方からのそれとしてあらわしていた。だがこのことを、

本書のなかに登場する 3 者(歴史上の人物、歴史記述者、歴史解釈者)のうちの、歴史を記述するものもそれを解釈するものも、それぞれの立場からとりあげてはいない。著者の森が設定した物語のなかでもっとも緊張が高まる場面は、忠震が聞いた、そして処分の元となったあらわされた直弼の嫌悪だった。それは両者が対峙する場面にあらわされたのではなく、伝聞としての登場だった。物語に登場する歴史上の人物としての忠震と直弼は、いわば、がっぴりと四つにわたって組みあうようには描かれなかったのだ。

さきにみた「歴史の陰」の歴史とは、近代日本史でよいのだろうか。日本を開国し、その近代史を主動したはずの忠震は、その歴史にしっかりと記されることはむつかしかった。それは、ようやく郷土誌の仕事となってあらわれ、郷土の偉人伝が忠震をとりあげる場となった。横浜での忠震顕彰碑建立は、郷土新城にとって、力強い支援と感じられたことだろう。郷土での忠震の位置がしっかりしてゆくにつれ、いいかえれば、郷土誌に記され、顕彰碑が建てられ、歴史資料館で展示されるにつれて、郷土の偉人としての忠震の表現が反復され、郷土と忠震に関心を寄せるひとによってそれが反芻されてゆく。郷土からの最新の忠震発信は、2004 年の展示図録の刊行だった。

## おわりにかえて

本稿でわたしは、敗者の幕末維新史、郷土の偉人伝、小説などのフィクション、における岩瀬忠震の書き方をたどってみた。したがって、本稿は、忠震の見方や書き方の歴史批評である。これは忠震の伝記ではない。わたしが忠震をとりあげたきっかけは、横浜市内に「横浜開港之首唱者」として忠震を顕彰する碑が建てられたからだった。直弼の顕彰とそのいわば文法をたどるなかで、それに異議をとねえる忠震顕彰を発見したのだった。

ところで、人物をとおして歴史を書くとは、そうではない歴史となにが、どのように違うのだろうか。松岡英夫はその著書(text5)で冒頭に、「歴史の動きを個人の言動から見るのは正しくないとはわかっていながらも」「(はじめに)」との留保を明記していた。1980 年代にこのような内規が、どこかできたわけでもないだろう。推測すれば、歴史の法則性を掲げた戦後歴史学の影響が、松岡のどこかしらにあったことのあらわれなのだろう。松岡は本書冒頭の同じ場所で、忠震のとりわ

け「青年期の生活内容については、まったく不明」で、彼についての史料が「断片的で、つながりがない部分が多い」と指摘していた。この史料の不充分さにくわえ、「彼が歴史的人物として存在したのは、嘉永七年(安政元年=一八五四)から安政六年(一八五九)のわずか六年にすぎないので、「その前後の彼の個人のありようは、あまり大きな意味をもたない」と、忠震の生涯を、彼を考察するために必要な時間とそうでない時間とに区分けをすると宣告していた。松岡の『岩瀬忠震』は、その誕生から死没までの出来事をできるかぎり丹念に確定する意味での伝記ではなく、忠震を「日本を開国させた外交家」としてあらわせばよいと、その書き方をあらかじめ限定していたのだ。この意味で松岡の書は、評伝としよう。いや、たんなる評伝でもなく、史料をふまえているとはいえ、これは松岡による忠震の頌述のつらなりだった。わずかな筆の走りや瑕疵とかたづけられてしまうかもしれないが、前出の「(岩瀬の指示を受けてのことだろう)」との挿入は、フィクションの世界での忠震への頌辞と指摘される可能性を開いてしまったのである。忠震の評価をめぐる、中公新書の1冊である松岡の著作とフィクションとの境界が曖昧になったのだ。

松岡は、忠震を敗者の側に位置づけながらも、その「開国」への功績を讃え、忠震とは決意や性格において直弼を対照の位置におき、それをとおして直弼を評価しないのだった。その直弼は、幕末維新史を書くうえでけしてはずせないひとでありながらも、そこで彼を勝者とする歴史記述は、依然としてほとんど認知されてはいないだろう。しかも、直弼はみずからの意思に反して殺されてしまったのだから、石井孝が構想したように敗者におかれることがあっても、勝者としては書かれにくい。忠震と直弼を対照の位置におくとき、それと前者=敗者 / 後者=勝者という区分はしづらいのだ。そして、松岡がいうように、忠震の「開国思想」は「明治の時代ともなれば、当然のこととなった」と評価するとき、開国のすえに成立した近代という時代、さらにはその延長上にあると考えられる現在において、忠震がそうした時代転換期の「傑出した先覚者」として褒賞されるのであれば、その栄誉のいくぶんかは直弼にも与えられてよいのではないか。近代(ひいては現在)からの評価では、忠震と直弼の違いは曖昧になってしまいそうだ。だがそうはならない。この否認されがちな歴史のなかの人物評 忠震を開国の推進者として評価するならば、それは直弼も同じではないか その控えめの提案を、あるいはそう問う可能性をみせたのが、ここでみたテキストではフィクションの作品、とりわけ小説とみずから銘打った『光芒遥かなり』だったのだ。

直弼や忠震とほぼ同時代のひとである福地源一郎がまず、忠震を軸とした幕末史をあらわし、そこで忠震とは対照の位置に直弼がいると読めるようになっていた(もう1つ福地は二分された直弼評にも着目していた)。両者の没後、だれの目にもかんたんにみえやすい公共の場での顕彰は直弼のほうがはやく、20世紀初頭にその銅像が横浜、彦根であいついで建立された(書籍においては、福地が忠震をとりあげた著述が1890年代のことで、島田三郎の『開国始末』は1888年)。それからずいぶんと時間を経た、忠震没後100年、日米修好通商条約締結100年をかぞえる1960年代初頭に、郷土出身の「開国の決断者」として忠震が再発見され、それ以降、忠震は郷土の偉人として仰ぎみられてゆく。他方で、勝者の維新史を批判するものによっても、忠震はその批判の位置を確保する敗者の立場の代表としてみつけだされ、そこでは、直弼との対照で忠震の偉業が瞭然とあらわされた。開国や開港の推進や達成をめぐって、直弼を否認することで忠震を顕彰する所為は、1980年代に、1つには松岡の著作刊行によって、もう1つに横浜での出版と建碑の顕彰活動をとおして、もっとも昂揚した。過去には直弼と徳川斉昭、あるいは吉田松陰という対比があったところにくわえて、忠震と直弼という対立が文献のなかにも、顕彰碑のかたち<sup>23)</sup>においてもあらわれたのだった。

とはいえ、横浜で建てられた忠震の顕彰碑は、直弼の銅像が立つ掃部山よりも横浜のはずれとなる旧神奈川宿にちかい本覚寺の山門の外だった。本覚寺がかつてアメリカ領事館に使われた寺院だというゆかりがありながらも(しかし、忠震はそのときの領事館には来ていないのではないか)、「開港」にかかわる顕彰場所としてそう恵まれているとはいえない。開港場を横浜とするか神奈川とするかの議論の一方の場所であり、開港場横浜からはとおいのだ。しかも、直弼銅像がその全身の肖像彫刻であるのにくらべると、忠震顕彰碑の肖像はというと、レリーフが、しかも顔だけのそれがあるにすぎない。だが、こうした碑はそこにあることによって意味を持つようになる。新城からは、わが町よりもさきに建てられた横浜の顕彰碑について、「実にどっしりとしている。とりわけ、忠震のレリーフがすばらしい」(『爽恢』text8)との賛辞をおくられていたのだった。全身像ではない顔だけの肖像だとしても、忠震のそれにはつぎのようなうけとり方もあらわされている(同前)。

<sup>23)</sup>横浜ではこの2者に佐久間象山顕彰碑がくわわる三つ巴となる(前掲阿部「直弼／象山／忠震」(1)(2)(3 未完)を参照)。

岩瀬忠震の肖像画を見ると、額は広く、鼻筋が通っており、切れ長の眉と澄んだ眼や、引き締まった口元は、温容のなかに鋭い才気を感じさせる。生まれながらの明敏さに加えて、学んだことはすべて吸収する、その卓越した知力と気力は並みはずれたものがあった。

この作者名が明示されていない「岩瀬肥後守忠震肖像画」は、横浜の顕彰碑のレリーフによく似ている。誉めすぎの感があるとはいえ、たった1つの画像がこれほどの頌辞を述べさせてしまう証左となる。



敗者の幕府側ということであれば、忠震も直弼も同じ位置におかれ、勝者の薩長史観からする幕末維新史への異議申し立てを、両者の顕彰とともにおこなってもよさそうなものだが、そうはならなかった。直弼を顕彰するものたちにも、維新以後への強い憤懣は長い年月にわたって引きずられてきた。未公開の井伊家所蔵史料を収載した『井伊家史料幕末風聞探索書』(1967-1968年)には、岸上が引用しなかった井伊正弘による「あとがき」がある。そこで編者の正弘は、「従来の幕末史はどちらかといえば明治維新の勝者側の一方的な史料のみを故意に採用して、敗者である徳川幕府の処置は何事によらず総て誤りであったとする偏見に満ちたものが多かったように私には思われる。史学においてもやはり「勝てば官軍」的風潮、いい換えれば時の政府の御用史学的風潮がなかったとはいいい得ないように思われてならない」と書いていた(「あとがき」執筆の日付は、「昭和四十三年三月三日」となっている)。同書の解説で末松修が「講釈的偏見が多い」と嘆いていた幕末維新史の書き方は、正弘によれば官学アカデミズムにもおよんでいたというのだ。勝者の立場から書かれた幕末維新史では、直弼は敗者の側におかれてすべて誤りとされてしまったのではないかという口吻がうかがえるだろう。前出の石井が掲げていたとおり、こうした幕末維新史の書法があるからこそ、敗者という観点から勝者の維新史や皇国史観への批判が目指されてきた。この観点をさらにおしすすめると、直弼によって退けられた忠震を復権することになると書かれた幕末史が、松岡の著作だった。

川崎紫山と福地を1つの淵源とする(ただし彼らは直弼を完全に否定してはいない)、石井や

松岡の敗者という観点からの忠震の書き方は、1つには横浜での忠震顕彰、もう1つに忠震の郷土とされた新城(愛知)での彼の偉人化につながってゆく。前者では直弼ではなく忠震への賞讃が主張されたのだが、後者では直弼の排除が第一義の目的とはなっていなかった。「岩瀬忠震顕彰碑建立記念誌」の『爽恢』が認めようとすすめていたとおり、直弼も(そして忠震も)現在に到る日本の繁栄の基礎をつくった歴史上の人物として評価されてよいはずなのだ。

ここで、戦後歴史学の一端を担いながらも、それをいらか離れたところで観察し動かしてきた鹿野政直を参照しよう。さきにみたとおり、松岡は、忠震伝を書くにあたって、個人の言動から歴史の動きをみることの不適切さに理解をみせていた。対して鹿野はむしろ、「人生を主題にして歴史をみる手法」を掲げている(『歴史のなかの個性たち:日本の近代を裂く』(有斐閣=有斐閣選書、1989年)。わたしはさきに、松岡の主張から歴史の法則性を掲げた戦後歴史学の匂いを嗅ぎとったと述べた。鹿野は自己の手法の要因を3つあげ、1つにはくだんの「法則性の認識」を示し、しかし2つにそれへの距離感のあらわれとなる「歴史主体への関心」を述べ、3つが前出の両者の統合となる。鹿野が関心を寄せる歴史主体とは、「歴史を生きた人びととそれぞれの「秩序への違和感」」のことであり、この観点により「人物史はとかく英雄史への傾きをもつとされる」事態からの転換を図って、「いわゆる草の根の民衆」をも歴史にかかわりそれをつくりだしてゆく主体としてとらえるとの課題なのだった。これは、歴史の法則性に対して、歴史をかえる可能性(すなわち、「可変性」)となる。鹿野は、歴史のなかの人びとを、「歴史の矛盾の体現者として、つまり法則性と可変性の結節点として存在する」とみるとの構えを表明したのだった。

こうした鹿野の覚悟あるいは決意を参照すれば、さきの松岡の留保はほとんど意味を持たないこととなる。ひとの個性や人生から書く歴史もありえるのだから。では、「敗者」という観点は有効だったのか。勝者とはいいかえれば、維新を実現したものたちとなり、維新後の世にもそこで編まれる歴史にも自己の場所のないものたちが敗者の謂である。後者の位置から前者の独善性や恣意性を撃つという狙いが、敗者という観点だった。ただしここには、敗者のほうが勝者より優れている、あるいは、敗者も優れていたといういどにとどまる可能性や、もしくは、対象に埋没して

敗者を褒めそやしてしまう陥穽があった。勝者と敗者という二分法自体が問う必要がある<sup>24)</sup>。そして、鹿野の個性や人生への着目も、それぞれのひとのその後を視野に入れたり追記したりしたとき、そこにはどのような相貌があらわれると鹿野は考えるだろうか。これはわたしがみずからに課した問いでもある。

さきに、忠震の郷土と自覚する場所から発信された、最新の、まとまった忠震情報は、2004年発行の展示図録だと示した。その後、横浜が2009年に開港150年を迎える、そのプレイヴェントの1つに、「みんなで創る記念事業」というウェブ・サイトが設定され、彦根市が2007年に開催した彦根城築城400年祭のイベントの1つである「開国カンファレンス」もふまえた投稿があった(<http://yokohama-lab.com/y150/blog/event/article/atc00000134>。閲覧は2007年7月2日時点)。まず、「しんしろ市民」による「岩瀬忠震をご存知か？」(2007年4月11日付)という題の投稿が掲載された(このハンドル・ネームが「新城市民」と表記されていたこともあった)。そこには、

井伊直弼が、「日米修好通商条約」締結の英断を下した。また、横浜開港の立役者というのは間違いです。/井伊は、英断を下したのではなく、ハリスと岩瀬忠震、井上清直の交渉の結果、いやいやながらしぶしぶOKサインを出しただけです。後には英断だと言われたかもしれませんが、彼は開明派でもなく、開港も渋っていた頑迷な保守派でした。/それに対して、岩瀬忠震は、開港後の幕政に対して青写真を持っていましたし、ハリスの開港要求の港は、大坂であったのに対し、当時は寂しい漁村であった横浜村を、ハリスに開港場として推薦したのです。井伊は、すぐれた政治家ですし、条約締結の結果暗殺された、開国の立役者であったのですが、岩瀬忠震こそが横浜港の恩人であることはまぎれもない事実です。

との主張があった。

それに対して、「横浜太郎」を名乗る人物が、表題「井伊直弼が何か悪いことしましたか？」を投稿した(2007年05月08日付)。そこでは、

1:井伊直弼がお嫌いですか？/2:彦根市に何か恨みでも？/3:新城関連の物事で御商売とか

<sup>24)</sup>前掲井伊編『井伊家史料幕末風聞探索書』にも「勝者」や「勝てば官軍」という視点を超えようとする方針があったが、それにとどまらず歴史の事態がそれをあらわすための史料の偏在や無視につながることを示し、その修正を自己に課していた意義があった。

なされていて横浜に恩でも売りたい方？〔中略〕あなたが書かれた「間違い」とか「こそが」とか「であることはまぎれもない事実」って、この不特定多数の老若男女が見るであろうコメント欄に対して常軌を逸した発言に思いますが如何？〔中略〕ご自分所縁の地の人物をヨイショしていく気持ちはわかりますが、だからといって他の地の人物を引き合いに出して蔑むようなその発言はモラルに欠けませんかね・・・／どう読んでも、多くの方々に史実を伝えようという語気が感じられないのは私が薄学なせい？／また、もしあなたがその井伊直弼を誇りに思っている(であろう)彦根市の市民で、あのように書かれたら気分悪いというか立腹しませんか？／因みに私は、ただの横浜市在住在勤の民間会社員です。／一住民として横浜に関することで争いが起こる可能性の有る発言をされるのは非常に迷惑に感じますので、前掲のコメントを取り下げる行動を進められることを希望します。なにも、彦根市の人に詫び入れるべきだとは言いません。／〔中略〕また、ここを管理されている方も、盛り上げて行こうとしている最中に、コラボる相手の人たちが不愉快に思うであろうコメントの掲載は控えた方が良いのでは？・・・／〔中略〕私のように、彼の人のコメントを読んで、楽しみにしていたこれ関係の全イベントを何か汚された<sup>マ</sup>感じてしまっ<sup>マ</sup>て、行きたく無くなる方が居られるとカワイソウですので、宜しくお願い致します。

との応答があった。横浜開港 150 年を祝うにさいして、その開港の恩人はだれか？と問われ、さらにそうした議論をおこなうこと自体の非が提起されたのだ。史実や立場にのっとり、他者の思いや都市間の友好を尊重するかのような発言にみえるが、一方でブログにありがちな文体からは、ただの不機嫌さと潔癖さの裏返しの弱弱しさしか感じられない。いまもなお、忠震と直弼のあいだにこうした感情による物言いが入り込む余地があるのだ。

岩瀬忠震とはどのような人物か？井伊直弼はなにをしたひとか？といくら問うても、たとえば、どちらが「横浜開港の恩人」なのかは、あるいは、直弼は「開国の偉人」か否かは、解明できないのではないか。わたしたちの仕事は、「開国」の功労者として郷土の偉人を褒揚することの意味、開港という出来事を人物によって表象する社会の仕組み、顕彰や褒顕という共同行為をつうじてあらわれる歴史のつくり方を考えることなのだろう。